銀の放浪老人

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の放浪老人

【Ｎコード】
Ｎ８０９０Ｘ

【作者名】
脳好き人間

【あらすじ】
一人の老人が、世界のため、自分の快適な生活のため、可愛い孫を手に入れるために、世界を放浪する物語。

ほぼ会話オンリー、ほぼ毎朝更新、ほぼほのぼのファンタジー、の

ほぼ三つを目標に掲げています。ついでに言うと、ほぼ思いつきで書いています。クオリティーには自信がありませんが、暇なときの暇潰しにでも読んでもらえると嬉しいです。

プロローグ

「千、いや、千五百くらいですかねぇ」

一人の老人が呟いた。

「そろそろ対処しないとバランスが崩れてしまいそうですね。久しぶりに、旅立つとしますか。ええ、まずは服装ですね、いかにも紳士っぽい感じでいきましょう」

そう言うと、老人は黒いスーツを着て、頭にはシルクハットを、顔にはモノクルを被り、ステッキを持った。

「うーむ、これぞ紳士って感じですねぇ。名前は、銀次、でいいでしょう。銀は老人の象徴ですからね。ではギルドでの名は、シルバ、にしましょう」

老人は、適当に名前とギルドでの名を考えると、満足気に頷いた。

この世界では、ほとんどの住人が名前を二つ持っている。一つは親から名付けられる名で、もう一つが自分の職業を決めるときにギルドで登録する名だ。

必ずギルドに登録しないといけないわけではないが、ギルドから発

行されるギルドカードは現代でいうキャッシュカードやクレジットカードの働きをしてくれるので、ほとんどのヒトはギルドに登録している。

ギルドカードがないと、いちいちお金を持ち歩かなければならないため、世界を身一つで放浪する予定の老人には絶対に必要なことだ。

「世界はずいぶん便利になりましたね。私が若い頃はギルドなんて無かったのに。誰が考え出したのでしょう？」

「まあ、とにもかくにも、まずはギルドに向かわなくては」

こうして、銀の放浪老人の旅が始まった。

プロローグ（後書き）

登場人物紹介

銀次（約二百五十歳、人間族）

黒いスーツ、シルクハット、銀のステッキ、モノクルという出で立ちで、本人はこれが紳士の正装だと思っている。
今一番欲しいものは『世界の平和』と『孫』。

殺人鬼との邂逅（前書き）

ほのぼの？
会話オンリー？

……あれ？

殺人鬼との邂逅

「名は、シルバ、ですね。職業は何ですか？」

「職業、ですか？」

ギルドの従業員に尋ねられ、老人は困ってしまう。

「特にこれといったものが無ければ、適当でいいんですよ。例えば、冒険者、とか？」

老人の様子を見兼ねた従業員は、助け船を出した。

「冒険者！素晴らしい！それに決めます！」

「え、はい。わかりました」

従業員は突然の老人の豹変ぶりに驚きながらも、冷静に対応した。
そこは流石プロ、といったところだ。

「はい、手続きは終了しました。こちらがシルバさんのギルドカードです。御受け取り下さい」

「ふむふむ、早いですね、しかし冒険者、ですか。思ってたより俄然やる気が出てきました！」

鼻歌を歌いながら、老人は壁に貼ってある賞金首の手配書を見て、ギルドから去っていった。

「やっぱり殺人鬼ですか。殺人鬼が増えすぎると二百年前みたいになってしまいますからね。可哀相ですが仕方がありません」

老人は人気の無い森の中で呟いた。

「この近くのはずなんですけど、見つかりませんね。もしもし、殺人鬼さん。いるなら出てきてください。出てきたら飴ちゃんあげますよ」

「なに、それは出てくるしかねえじゃないか」

「ふむ、本当に出てきてくださいましたか。飴ちゃんをどうぞ」

「おう、ありがとな」

バキッ

男は飴を受け取りながら、老人の首にナイフを突き刺した。いや、突き刺したつもりだった。

「な、ナイフが、折れた？」

「今のは、殺そうとしたのですか？それとも、最近流行りの挨拶ですか？」

「殺そうと思ってやったんだよ。今日はまだ誰も殺してないからな。一日一殺が俺のポリシーなんだよ。」

「すみませんが、一週一殺くらいに減らせませんか？煙草の減煙みたいな感じで」

「そんなこと、出来るわけねえだろ！」

叫びながら、男は隠していたナイフを老人に投げ付けた。

「おっとっと、危ない危ない」

老人は持っていたステッキでナイフを弾き、そのまま男の首に突き刺した。

「減煙、いや減殺してくださないなら殺処分するしかないですが、それでも駄目なんですか？」

「一日一殺しねえと、すげえ苦しいんだよ。お前ら人間にはわからねえだろうがな！」

一瞬で首から下が再生した男は、先程弾かれたナイフを拾おうと駆け出した。

だがその努力も虚しく、ステッキで体をバラバラに分解される。いや、分解され続ける。

「はい、最後の一つですよ」

「何が、だ？」

「あなたの命のストックが、ですよ。思ったよりも殺してはいなかったようですね。最近まで殺しを我慢してたのですか？」

「最近までは、な。そのせいで、恋人を殺しちまったんだ」

「それは可哀相に。今からでも減殺してくださるのなら、見逃してあげますよ。殺しを我慢したことのある殺人鬼というものは、珍しいですし」

「いや、もういいんだ。どうせ生きていたって殺しつづけるだけだ

しな。そのステキなステッキで殺してくれよ」

「了解しました。そのステキな駄洒落に敬意を表し、あなたを始末して得た賞金の半分くらいでステキな墓でも建ててあげましょう」

「それはそれはどーも」

老人は苦笑いを浮かべる男の頭にステッキを振り下ろした。

「それにしても、殺しを我慢する殺人鬼、ですか。黒矢少年のことを思い出しますね。彼は今でも正気を保っているのでしょうか？気になります、行ってみましょう。お金も手に入りましたし」

殺人鬼との邂逅（後書き）

登場人物紹介

男（二十歳、殺人鬼族）

ヒトを殺さなければ生きていけないはずの殺人鬼には珍しく、最近まで殺しを我慢していた頑張り者。
色々苦しんだりしてたけど、ステキなステッキで殺され、ステキな墓を建てられた。
好きな食べ物はステーキ。

鬼の料理人（前書き）

知り合いが、この世の終わりがきたみたいな表情で言っていました。

「プリンに、プリン体は含まれていない」

あの言葉には、どんな意味が隠されていたのでしょうか？

鬼の料理人

「気配的に、黒矢少年はこの店の中にいると思うのですが、『科学食堂』ですか。なんだかあまり入りたくない店名ですね」

「いらっしゃいませ。あれ、もしかして御大老様ですか？」

「はい。大体二百年ぶりですね。しかし、今はその名で呼ばないでください」

「え、じゃあ、なんと呼べばいいんですか？」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次、とお呼び下さい」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、本日はどのような御用件で？」

「本当に呼ぶとは驚きですね。ただ、黒矢君があの時言ってた約束を守れているか、確かめてみようと思っただけです。まあ、大丈夫そうなので安心しましたよ」

「『正当防衛』以外でヒトを殺さない。ですね。最初の方はきつかったですけど、今はもう大丈夫ですよ。相棒も出来ましたしね」

「相棒とは、奥で何やら怪しい物質を作っている方のことですか？」

「いや、本人いわく、料理ですよ。科学と料理には深い関わりがあるそうです」

「しかし、吸血鬼が料理（？）とは珍しい。それに、かなりの力を感じます。あの方は一体何者なんです？」

「ただの変人ですよ。変態でもありますが」

「私は変人でも変態でもない。天才だ！」

「うわっ！」

「おっと危ない。大丈夫ですか、黒矢君？」

「大丈夫ですよお爺さん。気絶しているだけ。あっ、さすらいのステッキ職人銀次さんでしたっけ？」

「全然違いますよ。それにしても、黒矢君が気絶するなんて。貴女は一体何者なんです？」

「ええと、ギルドでの名は、リイレです。ああ、黒矢の知り合いなら名前を教えておかないといけませんね。吸血鬼の怜悧です」

「怜悧さん、ですか。もしかしてラッドさんの娘さんでは？」

「父を知っているんですか？」

「はい。二百年前の戦争でラッドさんに命を救われたことがありまして」

「あのダメ父も誰かの役にたったりしてたんですね。でもステッキ職人さんはどう見ても人間ですよね。失礼します」

「痛い！何をするのですか！」

「いえ、貴重なサンプルとして血液を採取させていただきました。銀次さんの皮膚は並のヒトとは比べ物にならない硬さでしたが、流石はあの武器職人さんの作った注射器ですね」

「なんで吸血鬼が注射器を使うんですか！」

「だって汚いし…」

「そんな！これは、堪えますね」

「うーん、血を見る限り、異常な点は見つかりませんね、って、なっ、泣いている！」

「う、泣いて、なんか、いま、せん。私は、旅人、ですし」

「マジ泣き！ちょっと、黒矢！起きてよ！この状況をなんとかしてよ！」

「う、うん？」

「し、紳士、たるもの、レディ、には、暴力、ふるえま、せんが、君、なら命、ストック、万単位、ありますしね」

ガギッ

「ぐわっ！」

「黒矢！大丈夫？」

「フッ、このナイフが、俺の命を守ってくれたようだぜっ。って、壊れてる！」

「ふむ、命を一つ減らすことも出来ませんでしたね。それにしても、今の攻撃が避けられなかったとは」

「ステッキ職人さん、黒矢は最近一人も殺してないから、ずっと苦しみで気絶寸前なんですよ。そんな黒矢に暴力なんてヒドイッ！」

「なるほど、気絶寸前の苦しみですか。大した精神力です」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、俺の大切なナイフをどうしてくれるんですか？」

「それに、さっきまでのは嘘泣きなんですか？私を騙すなんて」

「ナイフは弁償しますよ。あと、さっきまでのは嘘泣きです。貴方達を油断させるためでした」

「へー、ちなみにさっきのナイフは『刹那を生きろ』で買った物ですよ」

「え、そうなのか？」

「黒矢は黙ってて！」

バキッ！

「それに、さっき黒矢がステッキ職人さんのステッキで突き飛ばされた時に、私のビーカーとスポイトが壊れてしまいました。それも弁償して下さい」

「それは嘘で」

「私を疑うなんて酷い！泣きそうです！」

「……分かりました。全部あの店で買ってきます」

「ありがとうございます。流石はステッキ職人さん」

「…はぁ」

「あの娘さん、いい性格してますね。まあ、あれくらいじゃないと黒矢君の相棒なんて務まりませんよね。それに、あの時本気で泣いてしまってたこともバレずに済みましたし。結果オーライ、でしょう」

鬼の料理人（後書き）

登場人物紹介

黒矢（約二百歳、殺人鬼族）

二百年前の戦争のとき、銀次と正当防衛以外でヒトを殺さないと約束して、今だに約束を守っている真面目なヒト。色々あって怜悧と出会い、行動を共にしている。ヒトを殺していないため、常に苦しみに耐えている。そのせいですぐ気絶するし、足元がおぼつかないからよくこける。常連客からはドジすぎる可哀相なやつだと思われている。

怜悧（約二百五十歳、吸血鬼族）

黒矢と行動を共にしているマッドサイエンティスト。実験と研究が一番の楽しみで、興味があるものを見つけると我を忘れてしまう。科学と化学と料理を同じものだと考えている。生涯をかけて叶えたい野望があるらしい。実はかなりの箱入り娘で、黒矢に教えてもらうまで、吸血鬼なのに血の吸い方を知らなくて、血は常に用意されている飲み物だと思っていた。

刹那を生きろ！（前書き）

ああ、あの二人を登場させてしまった……

刹那を生きろ！

「はあ、ここにはもう来ることはないと思っていましたが、仕方がありませんね。それにしても武器屋の名が『刹那を生きろ』だなんて、趣味悪いですね」

キインッキインッ

「おっと、危ないです。そーいえばここの店員さんは店名以上におかしなヒト達でしたね」

「僕達」

「私達の」

「鉄製紙飛行機を」

「避けるとは」

「お前、ただ」

「者じゃあ」

「無いな」

「それに、私のネーミングセンスを馬鹿にしやがって。許さねえ。なっ、優平」

「いや、正直俺もあのネーミングセンスはどうかと思ってた」

「あの、すみません。武器を買いに来たんですけど」

「なんだって、じゃ」

「あ、あれだな。」

「いらっしゃ」

「いませー」

「二百年経ってもその喋り方は変わりませんね。ずっとそうなのですか？」

「いや、二人だけの時は普通に話しますけど、なあ、刹那？」

「まあね。つーか、あんな喋り方で一日中話してたら疲れちゃうよ。てゆーかあ」

「なたは誰で」

「したっけ？」

「いえ、以前素敵なステッキを購入した者です」

「あ、私このヒト覚えてる。駄洒落センスが絶望的なヒトだ！」

「なるほど。思い出した。俺達のこと、『あくまで悪魔なんですね、

でも飽くわ』とか意味不明な言葉を口走ってました」

「あのー、そのことは忘れて下さい。というかまさか二百年も覚えてるなんて」

「まあ、僕は悪魔だし」

「しだまくあはしたわ、あま」

「この世界はほとんどの種族がヒトって言われてるのに、僕達悪魔だけが魔族とか言われてるし」

「全く酷いよね。私達以外の全ての悪魔がヒトを滅ぼそうとしているといえど、これは明らかに人種差別だわ！」

「あのー、武器を」

「うるさいな、」

「黙ってなよ老人」

「あんたに必要な物なら」

「レジのところに置い」

「てあるよ、あんたは」

「人間の中では最強っ」

「ぽいし、特別大サービ」

「スしてやんよ。それに」

「死なねー奴と取引して」

「も意味ねーし、私は若い」

「魂が好みだしな」

「では、頂いておきますけど、やっぱり貴方達は魂とか食べるのですか？」

「超食べますよ。それはそれはこの星の住人の半分くらいは」

「なんですと！」

「いやいやジョークだっての。あたいらは温泉饅頭とか食って生きてるよ」

「魂とか汚そうだし」

「じゃ、元気でな」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん」

「素敵ステッキ職人さん」

「はい。それではまた、優平さん、刹那さん」

「いやはや、三十年分くらいの疲れが一気に溜まりました。もうここには来たくないです。しかし、私、いや、儂、やっぱ、私が買おうとしていた物が既に揃えられているとは、悪魔とは本当に恐ろしい生き物ですね。まあ、あの二人が特別なだけかもしれませんが」

刹那を生きろ！（後書き）

登場人物紹介

刹那（年齢不明、悪魔族）

優平とともに武器職人をやっている。ネーミングセンスは絶望的。ヒトと仲良く（？）するため他の悪魔から敵視されているが、魔族の王の弱みを握っているため、魔族で刹那に逆らえる者は優平しかいない。ブラックジョークを愛している。

空霧優平（年齢不明、悪魔族）

刹那と行動を共にしている武器職人。名前の通り優しい（？）性格をしており、気が向いたときは、客を殺そうとする刹那を宥めたりする。刹那のことを大切に思っているが、ネーミングセンスの悪さにはうんざりしている。

マッドサイエンティストって響きはカッコイイっすね

「買ってきましたよ。ナイフとビーカーとスポイト」

「あ、生きて帰ってきたんだ。ステキステッキさん」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、無事でしたか」

「ええ、かなり疲れましたが。取り合えず、約束の品です」

「怜悧の分まで買ってきてくださったんですね。あいつが言ってたことはうそな」

バキッ

「とにかく素敵ステッキじーさん、ありがとう。あの店の製品なら溶ける心配もないし」

「溶ける？ええと、貴女は料理をしようとしているのですよね？」

「そうですけど何か？」

「いえ、私、いや、我、いや、私には意見はありません」

「その喋り方、さてはまだ一人称を決めてませんね。そんなあなたにこれ、『一人称決まるそば』今命名」

「いつの間に作ったんですか！というよりその料理、食べれる物なんですか？」

「もちろん、さあさあ遠慮せずに」

「いえ、慎んで辞退、ぐわっ、あぐっ、ぐえっ、ごくん」

「あーあ、飲み込んじゃった」

「……」

「あのー、大丈夫？」

「ふむ、大丈夫ですよ。これしきのことで我輩に異常がでることはありません。しかし貴女、レディが暴力を振るうものではありません。余は悲しいです」

「我輩に余、か。ふむふむ。そういえば黒矢に食べさせた時もこんな感じだったような。完成品にはまだまだ遠いようね」

「黒矢君にも食べさせたのですか、可哀相に。もしかして、黒矢君がすぐ気絶する理由の一つに、貴女の料理を普段から食べていることが挙げられるのでは？」

「……いえ、そんなことはありませんよ？」

「はあ、黒矢君も大変そうですね。しかし、殺人鬼の相棒など、貴女のような良い意味でも悪い意味でも意志や意思が強い方でなければ務まりませんね」

「どういうことですか？」

「要するに、これからも黒矢君の面倒をみてあげてください、ということです」

「うーん、面倒をみてもらってるのは私の方だと思いますけど」

「それでも貴女は黒矢君の支えになっているはずです。黒矢君の貴女を見るときの目を見ればわかりますよ」

「えっ、どんな感じなんですか？」

「儂の口からは言えません」

「そんなっ、教えてくださいよ。正直、最近変な料理とか食べさせ過ぎだなって自覚はあって、内心黒矢に嫌われてないか不安に思い始めているんですよ」

「そんなに不安に思うのなら、変な料理なんて作らなければいいのでは？」

「それは出来ません。私には絶対にやらなければならないことがあるんです。そのためにはたくさんの実験データが必要なんです」

「やらなければならないこと、か。殺人鬼が殺しをしなかった場合に伴う苦しみを消すこと、ですね？」

「何故それを？」

「伊達に長生きしていません。まあ、難しいことでしょうが頑張っ

てくださいね、怜悧さん。それに、そこまで自分のために頑張ってくれる子がいて羨ましいです、気絶したふりをしてる黒矢君」

「えっ！聞いてたの！黒矢！」

「ギクッ、いや、そんなこと、ないよ？」

「さっ、さっきのは冗談だからね！私が研究するのは、あくまで私自身の趣味！勘違いしないでよねっ！」

「ほほえましい光景です。しかし、ツンデレという言葉が流行ってから、勘違いするな、等のセリフのかっこよさが微塵もなくなってしまいました。一体いつの間に変わってしまったのでしょう？」

マッドサイエンティストって響きはカッコイイっすね（後書き）

勘違いすんじゃねえ

とか、僕が小さい頃見てた漫画かなんかで言ってるキャラがいた気がするけど、あれも「ツンデレ」ってカテゴライズされると格好悪くなりますね。

ちっとばかし嫉妬しちまったよ（前書き）

十一月六日は、お見合い記念日、又はアパート記念日です。

特に意味はありませんが。

ちっとばかし嫉妬しちまったよ

「はぁー。優平くんには刹那さん、黒矢君には怜悧さんという相方がいますが、余には相方がいません。我にも相方が欲しいですね。どこかに儂のことを「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんかね？」

「そこの怪しいヒト、こんな森の中で何してんの？」

「「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんかね？」

「……」

「「おじいちゃん」と」

「お、おじいちゃん、こんな所で何してるの？」

「孫を探しているのですよ」

「孫、ですか。でも、少なくともこんな森の中にはいないと思いますよ」

「そんなことはありませんよ。貴女のような可愛らしい女の子に会えましたし」

「いやー、照れますね。褒めても何にも出ませんよ」

「うーむ、一つ頼みを聞いてもらえませんかね？」

「頼み？ああ、森の出口へ案内してほしいとか？」

「いえ、単刀直入に言いますと、私の孫になっていただけませんか！！」

「……」

「孫に、なっていただけませんか？」

「……」

「孫に、なってほしいぜよ！」

「……」

「孫に、なってくれないかな？」

「……嫌です」

「何故、何故断るのですか！」

「知らないヒトについていくなと親から厳しく言われておりますので」

「さっきはおじいちゃん、と呼んでくださったのに！」

「それは話を進めるために仕方なく、でした」

「そんなっ、こんな老人の心を弄ぶなんて、ヒドイッ！」

「このヒトと話すの疲れる。あのっ、森の出口はあちらですよ。早く出て行ってください！」

「は？ここはあの有名な『帰らずの森』ですよね。不老系の種族が自らの命を絶つために訪れるという。どうして貴女は帰り道を知っているのですか？」

「そ、それは……」

「それは、この森の主である死神族だから。おかしいですね？死神族はあの戦争で滅びたはずなのに」

「何故それを？」

「おじいちゃんは物知りじいちゃんですから。なるほど、最初に私に話しかけたのは、私が自殺志願者かどうかを調べるためなんですね？」

「はい。死神族の役目は、自殺志願者の不老不死系の種族の方達の命を刈ることですから。あなたのような変人は管轄外です」

「一族がみんないなくなってからも、その仕事を続けてたんですね。仕事内容も辛い内容でしたでしょうに」

「辛くても、それが仕事ですから」

「辛いなら、やめてしまえ。私の孫になれば、飴ちゃんだってあげますよ」

「飴ちゃん。ですか」

「飴ちゃん。ですよ」

「しかし、一族の遺志を守るためにも……」

「飴ちゃん。ですよ」

「今までだって頑張ってきてたし……」

「飴ちゃん。でーすよ」

「……飴ちゃん」

「飴ちゃーん」

「飴ちゃん」

「飴ちゃんどうぞ」

「いただきます」

「……」

「……パクッ」

「……」

「……しまった！」

「あーあ、食べちゃった」

「そんなっ！飴ちゃんで釣るなんてっ！なんてヒトだ！」

「おじいちゃんと呼びなさい」

「……おじいちゃん」

「大きな声で！」

「おじいちゃん！」

「よし。後は、貴女の呼び名ですね。なんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「ええと、名前忘れました。二百年も名前呼ばれてないし、仕方ないですね」

「じゃあ、我輩が命名しましょう。『おじいちゃんラブ子』は？」

「却下します」

「『じっちゃん好子』」

「却下」

「『グランドファザ子』」

「死んでください」

「『真子』」

「まこ？」

「気に入りました？」

「……孫だから真子ですか？」

「ギクッ、いや、そんなこと、ない、ですよ？」

「却下」

「ふむ、却下ですか。うん？そうだ、『却花』は？

「きゃっか？」

「なんか、花ってついてたら可愛いっぽくないでしょうか？」

「……却下。いや、却花でいいです」

「じゃあ、改めまして。よろしく、却花ちゃん」

「こちらこそ、お、おじい、ちゃん」

「ぐへへ」

「おじいちゃん？」

「いや、いいものですね、孫というものは。生きててよかった」

「大袈裟です」

「まあ、出発するとしましょう！」

「はい！」

ちっとばかし嫉妬しちまったよ（後書き）

登場人物紹介

却花（約三百歳、死神族）

千歳からが大人である死神族の中では、まだまだ子供だったため、二百年前の戦争のとき、森の奥に隠され、生き残った。それからずっと死神族の仕事を一人でこなしていたが、銀次に飴で釣られ、孫にされてしまった。孫と言いつつ、実は銀次より年上。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってあげましょう。

男は自慢話をしているとき、脳ではドーパミンが分泌されているので、自分の意思では中々止められません。お酒の席などで自慢話をされても、暖かく見守ってあげましょう。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってあげましょう

「ちょっとちょっと、黒矢君、怜悧さん、聞いてくださいよ！」

「白銀の旅人さん、一体どうしたのですか？」

「あれ、怜悧さんは？」

「今実験中なんで地下に篭ってます」

「はあ、残念です。怜悧さんにも儂の可愛い孫を見せてもらいたかったのですが」

「可愛い孫？ああ、そこの死神の子ですか？」

「はい。可愛いでしょう。却花って名前です」

「……却花です。よろしくお願いします」

「死神の生き残りか。……あっ！ヤバイッ！怜悧が来る！逃げるんだ却花ちゃん！」

「それは何故ですか？」

「それはっ！いや、もう遅い」

「……遅い？」

「し、に、が、み、ぞ、く。血液、採取、ヒヒヒ」

「ひゃあっ！やめてください」

「こんなところに死神族がいるなんて。良いデータがとれそうね。ジュルッ、おっと、よだれが」

「ちょっと！黒矢さん！おじいちゃん！助けて！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「あのー、黒矢君」

「な、なんですか？」

「私の可愛い孫は大丈夫なんでしょうか？」

「……」

「大丈夫なんでしょうか？」

「ええ、大丈夫だと思いますよ。多分血とかを結構採取されるくらいで解放されると思います」

「それって、大丈夫の内に入るんですか？」

「た、多分」

「どうして却花さんは連れていかれたのですか？」

「死神族だからでしょう。怜悧は珍しい種族を見つけると、血を採取せずにいられない性格をしていますから」

「血を採りすぎたりはしませんよね？」

「ええ、百年前くらいだったらヤバかったですけど、今なら大丈夫です」

「百年前？」

「……俺の命のストックが二つ減るまで血を吸われました」

「……」

「いやー、流石にあのときは死ぬと思いましたよー。ははははは」

「……」

「つっても、二回も死んだんですけどね。ははは」

「……」

「……」

「……先に謝っておきます。ごめんなさい」

「……」

「……」

「……」

「……」

「それにしても、帰ってくるのが遅いですね？」

「……」

「……」

「本当にごめんなさい！」

「……」

「本当にすみません！」

「……貴方は謝らなくてもいいです。儂の可愛い孫、却花ちゃんは、貴方に殺されたわけでなく、怜悧さんに殺されたのですから。責任は怜悧さんにとってもらいます」

「……」

「……」

「……」

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってあげましょう。

命とは、儚いものです。大切にしましょう。

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（前書き）

泣くということは、ストレス解消として、かなり効率が良いらしいです。

ストレスが溜まっている人は、泣きまくりましょう。

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね

「どうしてあのとき助けてくれなかったのですか！！」

「いや、だって、怜悧さん、怖いですし……」

「私っ！孫なんですよね！」

「はい、可愛い可愛い孫ですよ」

「じゃあ、勇気をだして助けてくださいよ」

「敵討ちの準備はしていたんですが……」

「敵討ちなんてしてもらっても少しも嬉しくありませんよ！悲しむヒトが増えるだけですし」

「「悲しむヒトが増えるだけ」ですか、いいこと言いますねえ。感動しました。いつの間にかこんな良いセリフを言えるような子に育っていたんですね、おじいちゃんとしては嬉しいです」

「いやっ、いつの間にか、とか、会ってからまだ三日も経っていませんよ！」

「ああ、そうでしたね」

「とにかく、私は怒りました。もうおじいちゃんとは口を利いてあげません！」

「そ、そんなっ！」

「……」

「あのー、却花ちゃん？」

「……」

「バーカバーカ！」

「……」

「布団が吹っ飛んだ」

「……」

「猫が寝転んだ」

「……」

「隣の家に囲いが出来たって、カッコイー！」

「……」

「却花ちゃん、その服似合ってるね。孫にも衣装。てね！」

「……」

「飴ちゃん」

「……（ぴくっ）」

「飴ちゃん、あげるよ？」

「……（じゅるっ）」

「おじいちゃんのこと、許してくれるのなら飴ちゃんあげるんですけどね」

「……」

「カウントダウンしますよ。五、四、三、二」

「いただきます！！」

「ふふふ、はい、どうぞ」

「（ぱくっ）……あっ、しまった！」

「約束ですよ、我輩を許してください」

「飴ちゃんで釣るなんて卑怯な。それが大人のすることですかっ！」

「約束は約束です。ふふふふふ、大人はみんなずる賢いんですよ」

「くっ、仕方がありません。おじいちゃんを許します。しかし……」

「しかし？」

「こんな子供を飴ちゃんで釣る大人とか、普通に考えれば不審者に

しか見えませんよね」

「え？」

「しかも自分のことを「おじいちゃん」とか呼ばせてるし。警察に通報されたら即、牢屋行きですね」

「……」

「私も悲しいです。こんな変態っぽい老人に無理矢理孫にされちゃって」

「……」

「しかもいざという時に助けてくれない。冷たいヒトに」

「……」

「こんな老人についていこうと考えたあの時の自分を殴ってやりたいです」

「そ、そん、な」

「それに……ってえぇ！泣いてるんですか！」

「泣、いて、なん、か、いま、せん。グスッ」

「いや、泣いてるでしょう？」

「却花、ちゃん。儂みた、いな、のと、一緒に、いたく、ない、の

なら、言って、くだ、さいよ。今まで、ありが、とう、ござ、い、ました。さよ、ならっ」

「え、ちょっと、待ってください！言いすぎましたっ。謝りますからっ。……ああ、行っちゃった。追い掛けないと」

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（後書き）

悲しい時に素直に泣けるって、いいことですね。

「おじいちゃーん！待ってよー！」

「一人にしないでよー、私、泣いちゃうよー！」

「ううっ、グスッ、ひくっ」

「却花ちゃん！どうして泣いているのですか？」

「だって、おじいちゃんが、私をおいて行くから」

「でも、却花ちゃんが、儂みたいなのの孫にされて嫌だみたいなことを……」

「グスッ、そ、そんな、こと、ない、もんっ」

「なら、あれは儂の聞き間違えだったのですね。すみません、お詫びに飴ちゃんあげます」

「わーい、ありがとう。（ぱくっ）……ちょろいな」

「うん？何か言いましたか？」

「うん。飴ちゃん美味しいなって言いました」

「そうですか、それは何よりです」

「（ニヤッ）」

「何故そんなに笑っているのですか？」

「いや、飴ちゃんがあまりにも美味しくて、幸せだな～って思いました」

「そうですか、却花ちゃんが幸せなら、それでいいです」

「……クスッ」

小さき策士（後書き）

子供は、大人が思っている以上に賢いです。

特に、親の様子を窺う能力は、大人以上かもしれません。気をつけましょう。

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（前書き）

動物は、親が受けたストレスを子が受け継ぐらしいですけど、親が万引きして恐ろしいめにあえば、万引きしない子が生まれてくるのでしょうか？

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね

「……ふむ、却花ちゃん。儂が目を離していた隙に、何か無くなっていませんか？」

「え？」

「たとえば、財布とか。入っているのはお金じゃなくて飴ちゃんですが」

「……無いっ！私の飴ちゃんがっ！」

「やはりそうですか。この気配、百々目鬼、ですか」

「百々目鬼、って、何なんですか？」

「簡単に言うと、目がたくさん腕にある泥棒ですね。」

「なんか怖いですね。目がたくさんあるなんて」

「ふふふ、大丈夫です。百々目鬼には大きな弱点がありますからね。とにかく、あちらに逃げたようですので、追いましょう！」

「ここにいましたか、泥棒さん。その財布はこの子の物です。返しなさい」

「へっ、みふかっひゃか。ひははははない、ふはえ、ほほえきひーふ」

「おじいちゃん！このヒト私の飴ちゃん食べてる！」

「ふん、魔法、ですか。鬼族が魔法を使うなんて珍しい。お名前を教えていただけませんか？」

「……わはひほひっはすわわはひははいはほ。はあひひ、わはひほはまへはほしへらへなひば、ひるぼめひはらほひえへやほう。ひーぶ、は！」

「ふむふむ、ギルドでの名しか教えてくれませんか。シーフ、いかにも泥棒っぽい名前ですね。まさか、ギルドに登録した職業まで、泥棒なんじゃ、ないですよね？」

「ふん、ほのほーひま！ははひはめんはいははら、はふすひすよふもはいのはっ！」

「ほう、それは素晴らしい自信です。その自信に免じて今回は見逃してあげます。しかし、次に、私の可愛い孫の持ち物に手を出したら、許しませんよ」

「ほー、ほーふるっへいふんら？」

「そのとき、貴女が私の孫になってくれない場合、捕まえて警察に

引き渡します。懸賞金、三千万ゴールドでしたね？」

「ほふひっへるは。ひゃはさひほり、おはへほははへをひひれほほう」

「ギルドでの名は、シルバ、です。本名は、貴女が教えてくれてから言うことにしましょう。では」

「ひゃーは！」

「はい」

「……おじいちゃん、色々聞きたいことがあるんだけど、まず、あのヒトは一体何者なんですか？」

「泥棒のシーフちゃんです。飴ちゃんをたくさん頬張ってたからうまく喋れていませんでしたね」

「なんでおじいちゃんは聞き取れてたの？」

「それは、年の功ってやつですよ」

「……」

「なにか不満があるのですか？」

「はい、私の飴ちゃんが！」

「それは、却花ちゃんが財布をちゃんと見はってなかったからでしょう。この世界は却花ちゃんが思っているほど甘くありません。自分の身は自分で守らないといけませんよ」

「……はい。ごめんなさい。次から気をつけます」

「よろしい、では、気を取り直して、買い物にでも行きましょうか。飴ちゃん専門店で、好きな飴ちゃんを五百ゴールド分までなら買ってあげますよ」

「えっ……はいっ！！」

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（後書き）

結局、百々目鬼の弱点、『近くで玉葱を刻む』を使うことはありませんでした。残念。

雨の日、古傷が疼くとか言うけど、それには科学的な根拠があって、あ（略）

雨の日、古傷が疼くのは、副交感神経が優位になるから、らしいです。

また、働きすぎ等で交感神経が優位になっていると、疲れ等を感じにくくなります。だから、過労死というものが存在するのだと思います。

たまにはゆっくりくつろぐことも必要です。

雨の日、古傷が疼くとか言うけど、それには科学的な根拠があって、あ（略）

「はあ、雨、ですか。古傷が疼きますね」

「古傷？おじいちゃん、怪我したことあるの？」

「まあ、昔の戦争のときまではごく普通の人間でしたから。というか、却花ちゃん、儂に敬語を使わなくなりましたね」

「だって、孫がおじいちゃんに敬語で話すっておかしいでしょ？」

「それはそうですが……」

「私が敬語を使わないっていうのは、敬意を持たなくなったってことじゃなく、親しみを持ったってことなんだよ」

「そうですか！それは素晴らしいです！」

「うん、だから、おじいちゃんの昔の話の続き、して」

「しかし、あの頃の話しはあまりしたくないのですが……」

「私、大好きなおじいちゃんのこと、知りたいのにな。駄目なの？」

「駄目なんかじゃありませんよっ！ええと、それは、二百年前の戦争のことでしたね……」

「……（にやり）」

「様々な種族が、自分が一番優れているとか主張し合って、世界中で戦いが起こりました。そして、世界は殺意でいっぱいになってしまったのです」

「はい、そういうことなら知ってるよ。森の中からでも様子は分かりました。」

「では、殺人鬼は殺意によって発生する。ということも知っていますか？」

「いえ……じゃあ、もしかして、あの時に殺人鬼が世界中に現れたのは、戦争での殺意のせいなの？」

「はい。そしてその殺人鬼によってこの星の住人のほとんどが命を落としました。その中の一人が、儂の妻、でした。儂が考えるに、殺人鬼は、星にかけられた呪いみたいなものなんじゃないですかね。ヒトを殺さなくては生きていけず、殺すほどに強くなる」

「奥さん、殺されちゃったの？」

「ええ、それで儂は殺人鬼に復讐するために、悪魔に武器をもらいました。このステッキがそうです」

「そのステッキ、そんなに恐ろしい物だったの！」

「はい。それで、儂は殺人鬼を殺してまわりました。中には千以上の命を持つのもいて、大変でしたが」

「殺人鬼を殺すって、その頃からそんなに強かったんだ」

「いえ、最初から強かったわけではありません。あくまで殺人鬼と戦う過程で強くなっていたんです。それで、人間の限界を超えてしまい、年をとらなくなりました。輪廻から外れてしまったんですかね？」

「いえ、私は死神族なんで分かるけど、輪廻なんて存在してないよ。死んだら無になるだけ。おじいちゃんは多分、悪魔に何かされたんじゃない？」

「あっ！それは盲点でした。そういえば、あの店で武器を買って、寿命で死んだ方は誰もいませんね」

「それで、おじいちゃんはどうなったの？」

「ええ、えっと、殺人鬼を全滅させました」

「すごいっ！つまり、おじいちゃんは世界を救ったんだね！」

「……嘘です」

「は？」

「儂がそんなこと出来るはずがないじゃないですか。殺人鬼を全滅させたのは黒矢君ですよ」

「え、ええ！」

「まあ、なんだかんだで今に至ります。以上！」

「ちょっと、どういうこと！！どこまでが本当なの？」

「……うっかり、可愛い孫に昔の暗い話しをしてしまいました。いけませんね、黒矢君のこともうっかり言ってしまいましたし、今度、謝っておかなければ」

雨の日、古傷が疼くとか言うけど、それには科学的な根拠があって、あ（略）

さかなさかなさかなー

魚を食べると、頭が良くなりますよ。

いやよいやよは、つまりいや、ってことです

「あのー、却花ちゃん。ここは一体どこでしょう？」

「どこって言われても、最近まで森から出たことのなかった私には分かるわけないよ」

「迷子になってしまいましたか。儂の場合は迷老人ですけどね」

「おじいちゃん、その歳になって道に迷うとか、恥ずかしくないの？」

「それを言うなら、生きてきた年数は却花ちゃんの方が長いですよ」

「こういうときだけ歳のこと言わないでよ！そもそも、人間と死神じゃあ歳の感覚が違うの。セミからすれば十年生きてれば相当な老人、いや、老蝉でも、人間の十歳って、まだまだ子供じゃないですか！」

「……まあ、そうですけど、そこまで必死にならなくても」

「……おっと、冷静さを欠いていました。うっかりですね」

「しかし却花ちゃん、敬語になってますよ」

「おっと、うっかりしてたぜ！」

「……」

「うっかりしてたっす！」

「……」

「うっかり、うっかり。てへっ！」

「……げっ」

「げっ、とはなんですか！そもそも、私は今まで敬語以外で話したことがないんですから、多少おかしくても仕方ないじゃないですか！」

「は、はい。そうですね。まあ、無理せず気長に頑張ってください」

「うん。ありがと……って、そういえば、今道に迷ってるんですよね。全然解決してないじゃないですか！」

「おっと、忘れていました。ですが、どうやらなんとかなりそうですよ」

「どうして？」

「あそこに大きな屋敷があります。そこの家主に道を聞きましょう」

「あの屋敷ですか。でも、こんな場所に屋敷を建てるなんて、怪しくないですか？」

「あれ、却花ちゃん。もしかして怖いんですか。死神族なのに？」

「そんなことないもん！ただ、安全を考慮してですね……」

「却花ちゃん。今のセリフもう一回」

「安全を」

「違う、その前」

「そんなことない、です」

「さっきと違う！」

「ひっ、怒鳴らないでよ」

「すみません。つい」

「全く、気をつけてよ。で、屋敷に入るのなら早くはいりましょう！」

「……飴ちゃん」

「はい？」

「さっき儂が言わせようとしたセリフ、言ったら飴ちゃんあげます」

「そんなこと言えませんよ！……（じゅるっ）」

「飴ちゃーん」

「くっ、なんて卑怯な」

「飴ちゃん！」

「そ、そんな、こと」

「飴ちゃん」

「そんなことないもん！」

「よし。飴ちゃんどうぞ」

「なんてヒトだ……（ぱくっ）」

「それにしても、却花ちゃん」

「なんれすか？」

「知らないヒトに飴ちゃん貰っても、ついて行ったりしてはいけませんよ。世の中にはどんな危ないヒトがいるかわかりませんからね」

「……」

いやよいやよは、つまりいや、ってことです（後書き）

ヤバイ人は自分がヤバイって気づかないものです

辺りに何もない場所にそびえ立つ怪しい屋敷

「もしもし！誰かいませんか！」

「おじいちゃん、まず、言わせてもらいたいことがあるんだけど、いい？」

「何ですか？」

「普通、ヒトの家に入るときは相手の確認をとってからじゃないと」

「今、そうしてますけど」

「だから、家に入る前！勝手に入ったら不法侵入だよ！」

「まあ、普通はそうですね。でも、どうやらここは普通ではないようです」

「それって……」

「この気配、グールですね。それも、二、三十はいます」

「グールって？」

「簡単に言えばヒトを食べる鬼です。食人鬼とも呼ばれてますね」

「え、それってやばくないですか？」

「やばいです。流石にグールに食べられたら死んじゃいますし」

「なんとかしてよ、おじいちゃん」

「仕方がないですね。じゃあ、五秒ほど目を閉じていてください」

「う、うん。いーち、にーい、さーん、しーい、ごー」

「はい、なんとかなりました」

「えっ？」

「全員、埋めておきましたよ。儂が若い頃のグールというものは、もっと強かったんですが、全く、最近の若い者は、情けない」

「おじいちゃん、強いんだね。見直したよ」

「そうですか、いやあ、照れますね」

「……でも、道に迷っているという問題は、少しも解決してないよ」

「……そうでした」

辺りに何もない場所にそびえ立つ怪しい屋敷（後書き）

登場人物紹介

グール達（年齢不明、食人鬼族）

屋敷を建て、ひっそりと、必要最低限の食事をして慎ましく暮らしていたが、突然不法侵入してきた老人に襲われてしまった。
子供を庇うため、必死に戦った大人達から埋められ、逃げようとしていた子供達も皆埋められてしまった。

人生、常に迷路（前書き）

さんーぽすすんでにほさーがるー

人生、常に迷路

「却花ちゃん。ようやく街、いや、砦のようなものを見つけましたよ」

「ええと、あっちですか？」

「違います。そっちには何もありませんよ」

「でも、気配が……」

「そうでしたね、死神族は不老系の種族の気配で見つけられる、でしたね」

「うん、よく知ってるね」

「伊達に長生きしてませんよ。しかし、その気配がどの種族かはわからないんですよね？」

「一度会ったことがある種族だったら分かるんだけど、まあ、今回はわかりませんが」

「ふむ、なるほど。じゃあ、その気配の持ち主には会わない方がいいでしょう」

「何故、ですか？」

「一慨には言えませんが、死神の世話になる者がいなくて、吸血鬼でもなく、殺人鬼でもない種族なんて、儂は一つしか知りません」

「それって？」

「悪魔、ですね。その気配に、このステッキと似た感じがしませんか？」

「……いえ、そんなことはないけど？」

「え？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「おじいちゃん、あんなにカッコつけて前フリしておいて、ハズレですか？」

「……」

「聞いてます？」

「……魔法を使います」

「えっ？」

「ワープします。街に帰りましょう」

「は？そんなことが出来るなら最初から……」

「ワープしますっ！」

「え、ちょ、うわあ！」

「ぎゃはははははは。久しぶりに強い奴の気配がしたが、ここ、だよな？」

「いない、な。この魔力の痕跡。ワープ、したのか？」

「折角楽しいバトルが出来ると思ったのに、残念だぜ。ひゃはははははは」

「この、魔王まおちゃんと戦う機会を逃すなんて、可哀相な奴らだ。しはははははは」

「あれ、魔王まお君だっけ？やばっ、自分の性別すら忘れてら！ふ、ふっはははははは！傑作傑作」

「まあいい、また、会う機会はあるだろう！人間族と死神族のコンビなんて、そーそーいないからな！てきゃてきゃてきゃてきゃ」

「……てきゃてきゃは、ねーな」

人生、常に迷路（後書き）

登場人物紹介

まお（年齢不明、魔王）

見た目は子供、頭脳は魔王。戦闘大好き、戦うためだけに生きていて、昔は相当暴れ回っていた。だが、刹那に弱みを握られて脅されるようになってからは、刹那に見つからないように隠れながら、強者を探して旅をしている。よく笑う。お気に入りの笑い方は「ぎゃはははははははは」である。

いい趣味してるね、って、必ずしも褒めてるわけじゃないんですね（前書き）

知り合いに「いい趣味してるね」って言われて、内心喜んでたら、あとからそれは皮肉の意味だと教えられました。

寝るときに曜日に合わせた鬼の面を着けることの、何が悪いというんだっ！

いい趣味してるね、って、必ずしも褒めてるわけじゃないんですね

「おじいちゃん、これは一体どういうこと？」

「これ、とは？」

「ワープ出来るのなら最初からしてくださいよ！」

「すみません。でも、ちょっとした、理由がありましてね」

「理由？」

「実は、魔法を使う度に寿命が削られていくのです」

「そんな。あの、何も知らずにあんなこと言って、ごめん」

「謝らなくてもいいのですよ、却花ちゃんは魔法のことを知らないようですから」

「いえ、少しだけなら聞いたことがあります。確か、魔力を使って凄いことをするって」

「……概ね正解です」

「でも、ワープの魔法って、魔法の専門家のエルフ族でも、使えるヒトはほとんどいないらしいですけど？」

「いえいえ、あんなの簡単なものです。なにせ寿命を犠牲にしてますからね」

「寿命……あれ、おじいちゃんって、二百年以上生きてるんだよね？」

「そうですが何か？」

「よくよく考えると、おじいちゃんは不老だし、寿命とか関係ないよね。というか、寿命云々は嘘？」

「ぎ、ぎくっ！」

「まさか、道に迷って困っている私を見て、楽しんでいたってわけじゃ、ないよね？」

「ぎくぎくっ！」

「怒るよ」

「……」

「怒ったよ」

「……」

「私を騙すなんて、許さない。謝っても許さないから！」

「……」

「何か言いなさいよ！」

「飴ちゃん」

「えっ？」

「飴ちゃん」

「あっ、飴ちゃんなんか貰ったって、許さないから！」

「そうですか、それは残念です。この飴ちゃんは儂が食べましょう」

「くっ、す、ストップ！」

「何ですか？」

「つ、もう二度と私を騙したりしないなら、その飴ちゃんで許してあげます」

「おお、なんと優しい。では、飴ちゃんどうぞ」

「……（ぱくっ）」

「これにて一件落着。めでたしめでたし、ですね」

どんなに楽しいことでも、飽きはやってくる

「はあ、却花ちゃん」

「なに？」

「旅って、言うだけなら楽しそうに聞こえますが、実際にやってみると、暇ですね」

「ですね。一日中歩いてるだけの日もあるし、野宿は面倒だし」

「今思えば、却花ちゃんが孫になってくれていなかったら、さぞ辛かったでしょうね」

「本とかに登場する旅人とかも、こんな感じだったのかな？」

「本に登場するような旅人は、何か目的があって旅をしているのだから、そんなことはないでしょう」

「そういえば、おじいちゃんは何か目的を持ってなかったの？」

「目的、ですか。そういえば、孫を見つけるという目的がありました！」

「……それ、もう叶ってるよ。他にないの？」

「うーん、あっ、ありましたよ！」

「何なの？」

「世界を救う！」

「……どうやって？」

「この前、殺人鬼について話したでしょう。殺人鬼が増え過ぎないように、間引きするんですよ」

「……」

「どうしたのですか？」

「いや、おじいちゃんのことだからふざけて言ってるんだと思ってたから、びっくりした」

「失礼な。儂は常に真剣に生きていますよ」

「でも、孫を見つけることと世界を救うことを同列に並べるなんて……」

「ふざけたことを言わないでください！同列になんて並べるわけがないでしょう！」

「そ、そうですよね」

「世界なんかと孫を一緒にしないでください。可愛い孫と比べれば、世界なんてゴミ同然です！！」

「……まあ、そうなるか。おじいちゃんだもんね」

「はい、ですから気をつけてくださいね。もし、この旅で却花ちゃんに万が一のことがあれば、憂さ晴らしに世界を滅ぼすかもしれませんから」

「せ、世界の命運が私にかかってるの？」

「はい、そうです。いまさら気づいたのですか。だから、日々、安全に気をつけて生活してくださいね」

「……は、はい」

どんなに楽しいことでも、飽きはやってくる（後書き）

最近、過保護すぎる親が増えすぎて、世の中が心配です。

それが子供の為になるって、本当に思ってるのでしょうか？

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち事

反語表現

学校での薬物乱用についての授業に効果はあるのだろうか、いや、無い。

実際、薬物乱用について授業をした学校よりも、してない学校の方が、将来薬物乱用をする可能性が少ないというデータがあるそうです。

人間、やってはいけないと言われるとやりたくなってしまうものですからね。

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち事

「てっ、てっ、てっ、て～」

「……おじいちゃん、どうしたの？」

「殺人鬼のテーマです。近くに殺人鬼がいますよ。気をつけてください」

「えっ！そんな、いきなり言われても」

ザクッ

「殺人鬼、とったどー！！」

「ぐっ、素敵なステッキに、刺されてる。なんてじーさんだよ」

「おじいちゃん、このヒト、見た目は女の子だよ。本当に殺人鬼なのっ！」

「ああっ！なんだてめえ。あたいのことをなめてんのかよっ！これでも立派な八十歳だっての！」

ザクッ、グサッ

「儂の可愛い孫に、乱暴な物言いしないでください」

「はんっ、余裕ぶった態度しやがって。これでもあたいは八十年殺人鬼やってんだぞっ。お前みたいな人間族、赤子の手を捻るように殺せるぜっ！」

「では、たかが人間族のステッキごときに串刺しにされている、今の状況はなんなのでしょうね」

「う、うるせーな。とにかく、放せよ！放してくれりゃあ命だけは見逃してやんよっ！」

「はあ、この状態でその態度、これはある意味感心しますが、暴れられては面倒です。魔法を使いましょう。ええと、コホン。ストップ！」

「か、体が動かねえ。くそ、なにをした！」

「貴女の顔以外の動きを止めました。これで貴女は抵抗できませんね。ぐへへ」

「なっ、何をする気だ！変態じじい！くっ、来るな！」

「変態じじいだとは失礼な。儂は紳士かつ旅人なんですよ。儂はただ、貴女に提案をしようとしているだけです」

「……提案だと？」

「単純に言うと、貴女、儂の孫になりませんか？そうすれば、命だけは助けてあげますよ」

「……ふざけるなよ。殺人鬼を孫になんて出来るはずねえだろ！お前は自分の命が惜しくないのかよ！」

「自分の命は惜しいですよ。当たり前じゃないですか。まあ、孫と自分の命だったら、孫をとりますが。とにかく、返事はイエスですか、ノーですか？」

「……ノーだ」

「そうですか、残念です。では、諦めましょう。却花ちゃん、行きますよ」

「え、う、うん」

「ちょっと待てよ！止めはささなくていいのかよっ！つーか、行くなら行くで魔法解いてからにしろよっ！おい、おーい！」

「おっと、そうでしたね。飴ちゃんをあげましょう。魔法は時間が経ったら解けます。それまで、飴ちゃんでもなめててください」

「ぐっ、へへー、ふはへへんひゃへーほ！」

「では、あらためて、行きましょう。却花ちゃん」

「うん……（じゅるっ）」

「ひょっ、ひょっほはれろー、ほーい！」

「おじいちゃん。さっきの殺人鬼、止めをささなくていいの？」

「止めをさすところ、見たかったのですか？」

「違う、けど、あの子を生かしてたら、知らない誰かが殺されるかもしれないし」

「儂も最初はそうしようとしていましたが。却花ちゃんは気づかなかったのですか？」

「気づくって？」

「あの殺人鬼、儂が魔法をかけるまでの間に、却花ちゃんを殺すチャンスが何度かあったのです。でも、そうしませんでした」

「それって……」

「普通、殺人鬼が八十年も生きてたら、殺す相手を選ぶ理性なんて残っていないものなんです。その心の強さに免じて見逃してあげました。それに……」

「それに？」

「随分と可愛らしい性格をしていました。孫候補として、将来に期待したいところですね」

「……」

「そうだ、却花ちゃん。ポケットの中に異変がありませんか？」

「ポケット？……あっ、飴ちゃんが、無い！もしかして、さっきの飴ちゃんって」

「その通りです」

「な、なんてことをするんですかっ！」

「あの殺人鬼に、命を見逃して貰ったのですから、相応な代償でしょう」

「そっか、私、相手次第では死んでたんだ」

「いえ、死にませんよ」

「は？」

「儂は出会ったヒト全てに、却花ちゃんに危害を加えようとすると体が腐る呪いをかけていますからね」

「……」

「ちなみに、呪いというのは、魔法の残酷バージョンみたいなもので……」

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち事件を起こすと思う

登場人物紹介

女の子？（八十歳、殺人鬼）

乱暴な言葉遣いをする殺人鬼の女の子。変態老人に出合い頭にステッキで串刺しにされたあげく、時間を止める魔法で身動きをとれなくされ、孫にならないかと提案される。あげく、孫になることを断ると無理矢理口に異物をねじ込まれ、そのまま放置された。

てっ、天啓が！（前書き）

閃いたっ！！

てっ、天啓が！

「そういえばおじいちゃん、前に殺人鬼の子を孫にしようとしてたよね？」

「そうですけど？」

「もしかして、孫の数を増やそうとか考えてる？」

「もちろん。いずれは、たくさんの孫を引き連れて、世界中を旅したいものです」

「……やっぱり」

「何か、問題でもあるのですか？」

「あるよ。あのね、ただでさえ老人が子供を連れて旅してるっていうのは変だし、そのうえ連れてる子供の数が増えたら、はたから見るとかなり怪しく見えるよ」

「なに、それは盲点でした。なんということでしょう。こうなったら、どこかに屋敷を建てて、そこに孫達と暮らすための楽園を作りましょうか？」

「それは困るよ。なんだかんだで、私はこの旅を楽しんでるし、そんな面白みのなさそうな生活になるのは、絶対に嫌だよ」

「し、しかし……」

「それに、私、おじいちゃんと二人きりでの旅がいいの。他の子が増えたら、おじいちゃんに構ってもらえなくなるじゃない！」

「嬉しいことを言ってくれるじゃありませんか！分かりました。却花ちゃんが寿命で亡くなるまでは、他に孫をつくりません。二人での旅を楽しみましょう！」

「……ふう、これで飴ちゃんの取り分を独占できる」

「何か言いましたか？」

「おじいちゃんを独り占めできて、嬉しいって言ったんだよ！」

大切なのは、金かね？

「おじいちゃん。三時のおやつの時間になったよ。飴ちゃんちょうだい」

「えっ、あぁ、はい……」

「うん？早くちょうだいよ」

「いや、その、あの……」

「まさか、な、無い、とか？」

「ははははは、は」

「そんなっ、楽しみにしてたのにっ！」

「……」

「どうして飴ちゃんが切れるまでに新しいの買っておかないのっ？」

「いや、お金がなくて……」

「お、お金？」

「よくよく考えれば儂達、働いていませんし。お金が尽きるのはむしろ当然といえましょうっ！」

「威張らないでよ」

「はい。すみません」

「でも、どうやってお金を稼ぐの？……このままじゃ、明日からも飴ちゃんが無い生活をしないといけなくなっちゃうよ」

「また、賞金首でも狩るとしますか……」

「いや、もっと平和的に稼げないの？」

「むう、平和的な稼ぎ方、ですか。……思えば、そんな稼ぎ方したことありませんね。世の中の一般的な方々は、どうやって稼いでいるのでしょう？」

「……はぁ、こんな大人にならないよう、気をつけないと……って、あった！平和的な稼ぎ方！」

「おお、それは一体何なのでしょうか？」

「この紙見て！」

「……闘技大会の案内ですね」

「優勝賞金、一千万ゴールドだって。一千万って凄いんだよね。飴ちゃんいっぱい買えるよね？」

「まあ、十万個くらいは買えますね。……しかし、これは平和的な稼ぎ方なのでしょうか？」

「おじいちゃん、何言ってるの。この世の中に、平和なんてあるわ

けないじゃない！こんなのとっとと優勝して、一千万ゴールド手に入れてよ！！」

「……」

「どうしたの？……もしかして、ビビってんの？」

「……却花ちゃん、儂は怒りました」

「はっ？」

「どうやら、甘やかし過ぎていたようです。少しは苦労も知ってもらわなければいけませんよね」

「……ま、まさか」

「却花ちゃんにも、出場してもらいます。死神族なのですから、多少は戦えますよね？」

「え、う、うん……」

「よし、そうと決まればとっとと受付に行きましょう！」

「う、うん」

「そうだっ、あのセリフを言っておかないと……」

「あのセリフ？」

「ふっ、決勝戦で、待ってるでゴンス！」

「……（ツッコミは、放棄しよう）」

大切なのは、金かね？（後書き）

死亡フラグ紹介

「……俺、優勝したら、あいつに告白するんだ」

ファンタジーには闘技場が必須！（前書き）

なんか、素晴らしい笑い方、ありませんかね？

「ぎゃはははは」、「シハシハシハシハ」に匹敵するような……

「さあさあさあさあ始まりましたよ。今年も世界中が熱くなる闘技大会。記念すべき一回戦でーす。赤コーナー、さすらいの料理人。人間族の、クックさんだ！この戦いで、いかに敵を料理するのか目が離せないぜっ。……あれ、今、上手いこと言ったよな。言ったよな？」

「おう、俺が料理人のクック様だぜ。よろしくよろしくよろしくなあ、嬢ちゃん？」

「……うざ、戦う相手も司会のおっさんも、両方うざっ」

「続きまして青コーナー。なんと絶滅したと思われていた、死神族の却花ちゃんだ。すごいぞすごいぞすごすぎるぞっ。その鎌で、一体いくつの命を葬り去ったというのだっ！」

「……」

「ルールはただ一つ、相手を殺さずに気絶、又は降参させること。……それでは、バトルスタートだっ！」

「お嬢ちゃん、先に言っておくけど、俺はどんな相手でも一切手加減しなクブォワッ！」

「ふふっ、戦いはもう始まってるんですよ。なにペラペラ喋ってるんですか？……って、聞こえてないですね。もう気絶してる。

情けなっ！……くすっ」

「一回戦は、却花ちゃんの圧勝ですか。しかし、却花ちゃん、容赦無い性格していますね。……この調子なら、二回戦の相手が儂でさえなければ、そこそこ勝ち残れたのでしょうね。……全く、世の中とは、思い通りにいかないものです。……可哀相に」

ファンタジーには闘技場が必須！（後書き）

登場人物紹介

クック（四十五歳、人間族）

包丁を使わせれば右に出るものはほとんどいない。でも、闘技大会では相手を殺すことが禁止されているため、包丁の代わりにフライパンを持参してきた。だが、それを使う間もなく死神族の少女に鎌で殴られ、気絶させられた。

老若男女、容赦しない。男女平等、若い者もお年寄りも、みんな平等さ（前書き

そうだっ！
いいアイディアを思い付いたぞ！

読者にストレスを与えまくるミステリー小説！

これはいい、素晴らしい

年末までには完成させてやるぞっ！

老若男女、容赦しない。男女平等、若い者もお年寄りも、みんな平等さ

「厳しい一回戦を勝ち抜いてきた、強者達の集まる、神聖なる二回戦。……これはなんて、悲劇。運命の悪戯か。赤コーナー、死神族の却花ちゃん。青コーナー、人間族の、銀次さん。なんとこの二人は、師弟関係、ではなくではなく、おじいちゃんと孫の関係なのだ。でも、人間族の孫が死神族とか、おかしくね。おかしいよ、おかしいよな？……まあ、とりあえず、バトルスタート」

「ふ、可愛い孫だからって、容赦しませんよ」

「こちらこそ。でも、おじいちゃん、「決勝で会うザマス」みたいなこと言ってたくせに、二回せっ」

「どうしたんですか却花ちゃん。なんだか苦しそうですね？……安心してください。その苦しみは、一秒ごとに増していき、一分が経つ頃には、全身が引き裂かれるような痛みを感じるだけです」

「そ、んな。魔法、なんて、卑怯、な」

「卑怯？戦いに卑怯もなにもありませんよ。どうします？……早く降参しないと大変なことになりますよ。……いーち、にーい、さーん……」

「降参！降参しますっ！」

「……おじいちゃんが、まさかあそこまで陰湿な戦い方するとは思わなかったよ」

「まあ、これで却花ちゃんも戦いの厳しさを知れたでしょう？」

「……うん」

「それだけでも、この大会に出た価値があります」

「……それでさ、おじいちゃん、優勝するつもりなの？」

「もちろんです。しかし、決勝戦は苦戦することになるかもしれません」

「おじいちゃんが、苦戦？」

「ええ、なんか、魔王が出場しているらしいです」

「まっ、魔王！」

「ええ、恐ろしいことです。しかし、久しぶりに本気が出せそうですねえ。少し、テンションが上がってきました。若者風に言うと、アゲアゲってやつですかね？」

「……おじいちゃん、無理して若作りするの、やめて……」

老若男女、容赦しない。男女平等、若い者もお年寄りも、みんな平等さ（後書き

ぎゃはははははははははははははははは

……奴が現れるぜよ

「……おじいちゃん、流石に全部の戦いで、同じ戦法を使うのは、どうかと思うよ」

「はあ、しかし、ステッキで戦うのは難しいものがあります」

「難しい？」

「間違えて、殺してしまったら大変ですから」

「……ああ、そういう意味か」

「しかし、決勝戦では、こうもいきませんけどね」

「魔王、だよね？」

「はい。魔王に魔法は効きませんから」

「えっ、どうして？」

「魔力が強い者には魔法が効きにくいのです。例えば、却花ちゃんは死神族だから魔力は結構強いので、普通の魔法は効きません。まあ、儂が使う魔法は、かなりの上級の呪いなので、防げるヒトはほとんどいないんですが」

「そ、そんな上級の呪いを、実の孫に使ったの？」

「ふ、その通り！まあ、そんな些細なことは気にせず、決勝戦は応

援お願いしますね」

「……もう、心からおじいちゃんを応援するの、無理だよ」

「飴ちゃん」

「是非もなしっ。頑張って応援するね！」

魔王とのバトルっす（前書き）

結局勝負ってやつは、よほど実力差がないかぎり、悪意が強い方が勝つんですよ……

魔王とのバトルっす

「皆さん刮目せよ！今から決勝戦を始めるぜ。赤コーナー、最強の破壊者まお。な、なんと自称魔王だってから驚きだ。でも、これまでの戦いを見るかぎり、マジっぽいぜ。怖い怖い。そして青コーナー、すげー老人銀次。人間族なのにここまで魔法を使って、余裕で上りつめてきた。恐ろしい魔法使いだ。世紀の戦いが今始まる。では、バトルスタート」

「あなたが魔王のまおさんですか。どうぞお手柔らかにお願いします」

「ぎゃはははははは。お手柔らかにだって。まあ、いいけどな。お前、年寄りっぽいし、人間族のわりには強そうだから、手加減してやるよ。……そうだな、右腕一本で戦ってやるよ。ひははははははははははは」

「それはそれは、ありがとうございます。……ところで、肩に糸屑ついてますけど？」

「えっ、教えてくれてサンキューな……ってぐぶぁっ！いてえ！てめえ、いきなりなんて卑怯ぶふぁっ、ゆ、許さねえ」

「戦いに卑怯もなにもありませんよ。どう、やらあなたは強すぎ、たせいで、戦いの心得とい、うものがわかってな、いようですねっと。危ない危ない」

「くそっ、ちょこまかと逃げやがって。こうなったら、必殺技を喰らわせてやるしかねーようだな」

「ちょ、ちょっと待った！」

「は？」

「必殺技とは、必ず殺す技、ということですよ。そんなものを使ったら、あなたは失格になってしまいますよ」

「な、そうなのか。危なかったぜ。教えてくれてサンキューな」

「いえいえ。……そうだ。教えたついでにこの飴ちゃんあげましょう」

「まじかっ！シハシハシハ、超サンキューな。……（ぱくっ）」

「ストップ」

「は、この魔王まお君ちゃんには魔法なんて効かねーよ。……残念だったなって、あれ？体が動かねーぞ？」

「これであなたの抵抗は不可能です。どうしますか？戦いを続けます？」

「く、くそっ。降参だよ。俺が負けるなんて、超傑作だよ。ぎゃはははははははははは」

「……私には、おじいちゃんが極悪人にしか見えなかったよ。でも、魔法は効かないんじゃなかったっけ？」

「ええ、普通なら。しかし、この『魔封じの飴ちゃん』をなめている者は、一時的に魔力を失います。いくら魔王といえども、そんな状態なら、魔法を喰らわせることが出来ます。飴を食わせて魔法を喰らわせる。いい作戦でしょう？」

「う、うん。……そうだね。でも、飴ちゃんを戦いに使うなんて……」

「飴ちゃんを戦いに使うのは、当たり前です。飴ちゃんとは、高齢者が使う人心掌握術の最たるものですから」

「……人心掌握術って」

「しかし、賞金がたくさん手に入りましたね。今回は却花ちゃんも頑張ったことですし、特別に飴ちゃんを買ってあげましょう」

「えっ、本当！やった、嬉しいな……（じゅるっ）」

「では、行きましょう」

「うんっ！……って私、今人心掌握術にかかってる？……まあ、いっか。別に誰かが不幸になってるわけでもないし」

魔王とのバトルっす（後書き）

死亡フラグ紹介

「殺人犯がいるような場所にいられるかっ。俺は自分の部屋に帰らせてもらうからな」

白馬に乗った玉子様（前書き）

やはり、かぜを、ひいた。

寝ている間に布団を蹴飛ばしてしまう癖、なんとか直すことは出来ないのでしょうか

白馬に乗った玉子様

「ふふふふふ。そこの可愛いお嬢さん。僕と一緒に仮装しないかい？」

「……おじいちゃん。変なヒトがいるんだけど」

「うーむ、玉子、です。玉子が馬に乗っています。どういうことでしょう？」

「玉子は玉子でも、白馬に乗った玉子だ！というか、老人には黙っていてもらおうか。僕はそこの可愛いお嬢さんに用があるんだ」

「ちょっと、おじいちゃん。こんな怪しいヒトなんかスルーして、早く先に進もうよ」

「……」

「黙っちゃったっ！」

「お嬢さん、僕は君と共に仮装したいだけなんだ。……そうだな、イクラ、なんてどうかな？」

「却下します！！……おじいちゃん、早く行こうよ」

「……」

「イクラが駄目なら、ウニや、サーモンでもいいんだよ」

「却下です。……ちょっと、おじいちゃん。置いていっちゃうよ？」

「……」

「中々手強いお嬢さんだな。燃えてきたよ。……大トロ、大トロなら、文句無しだろう？」

「却下です。というかあなたは一体何なんですか？」

「ふう、ようやく僕に質問してくれたね。僕は、仮装界の神とまで呼ばれている、伝説の男、フェイク様だ！」

「……そのフェイクさんが、どういった理由で私に話しかけてきたのですか？」

「それはもちろん。お嬢さんが花のように可憐だからさ。君なら僕以上の仮装をすることが出来るはずだ」

「……単刀直入に聞きます。どうすれば帰ってくれるのですか？」

「ふっ、つれないな。まあ、そうだな。お嬢さんが名前を教えてくれれば、今回は潔く諦めるとしよう」

「却花です！」

「うっ、そんな。……名前さえ教えてくれないなんて、流石にショックだよ」

「だから、却花ですって」

「そんなに却下却下言わないでくれよ。傷付くから。……というか、もう傷付いたよ。今日は、帰らせてもらうよ。次は、豆腐の姿で来よう。僕の心の強度は豆腐並だからね」

「……おじいちゃん」

「何ですか？」

「さっき気付いた、というか体験したんだけど、私の名前って、ヒトに誤解を与えやすくない？」

「でも、先程はその名前のおかげで、あの変人を退散させることが出来たじゃないですか？」

「それは、そうだけど……」

「しかし、また来る、という趣旨のセリフを言っていましたね」

「もう、会いたくないよ……」

「……儂も同感です」

白馬に乗った玉子様（後書き）

登場人物紹介

フェイク（二十五歳、泥人族）

仮装に命を懸ける熱い男。姿をある程度自由に変えられる泥人族であるため、多少無理があるものにも仮装できる。最近のマイブームは寿司。却花を仲間に引きずり込もうとしている。

ひさしーふ

「却花ちゃんに問題です。あるヒトが却花ちゃんのポケットの中にある飴ちゃんを狙っています。それは誰でしょう?」

「え、いきなりどうしたの?」

「残念、わかりませんか……」

「それってどういう……」

「ふふふ、ひょふははひりひはふいはは。はふははれ」

「ほら、姿を現しましたよ。確か、泥棒のシーフさんです。覚えてますか?」

「……あの、飴ちゃんをいっぱい口の中に入れてたヒトか。私の飴ちゃんを勝手に食べた……」

「おほへへふれはは。しはひ、ほんはいはほうやははひらへらひほいへなひよふははな」

「うむ、それは何故です?」

「おはえ、へんはいいははしひほほいはへはらろふ。あほほひひらひほるはへはらはふほうするは」

「おお、よく気がつきましたね。流石は天下に名高い大泥棒です。しかし、それでは何故儂達に会いにきたのです?」

「ひふは、はおーはらへんほふふんへら、ははしひはあふあへらいひ、おはへひはろふはほほほほっへら」

「ふむ、それで？」

「ほらえ、はおーほはおひしはひんはろ。ほほへんらほうほょうひらるはふはほら」

「はるほど。そしてそれには条件があるんですね。……却花ちゃん。少し席をはずします。ちょっとここで待っていてください」

「……え、それは一体どういうこと？ちょっと待ってよ。せめて理由を……行っちゃった」

「シーフさん。貴女もワルですねぇ」

「ひえひえ、あははほほ」

「では、例のブツは戴きましたし、約束通り、呪いを解きましょう」

「おお、ひょろひふは」

「……ふう。完了しました。しかし、貴女とは気が合うようです。これからも、こういった機会があればお願いします」

「ほふ、ははれほ。うん、ほはへろははははいふひあひりはりほうはひ、ははひろははえをほひえほう」

「ほう、貴女のお名前を？」

「ははひろははえは、ふふふ、ら」

「盗（ぬすみ）さんですか。貴女に相応しい名前ですね。しかし、本名盗でギルドでの名がシーフとは、ザ、泥棒って感じがしますね」

「はあは、おやはほほほうはっははらは。ひらひひひほうほほははえは、うはい、ら」

「ほう、妹さんがいらっしゃると。是非会ってみたいものです」

「はあ、あいふはいふろほほはほうほふいへるはら、あふろはふふはひいほおほうろ」

「そうですか。それは残念です。……おっと、こんな所に酒場が。……丁度いい、同盟をむすんだ記念に、飲みに行きませんか？」

「ほお、ほれはいい！」

「では、行きましょう！」

「……はあ、おじいちゃん、帰って来ないな。ちょっと待っててって言ってたけど、全然ちょっとじゃないじゃん！！」

幽霊とか、マジ怖い（前書き）

霊感のある人は、ほとんどの家に一人は幽霊がいるのが見えるのだと聞きました。

もしかして、我が家にも……

なんてことだ、一発芸の練習とか、駄洒落を呟いたりとか、見えない敵（空想）と戦ったりとか、全部見聞きされているというのか……

幽霊とか、マジ怖い

「きゃ、却花ちゃん。幽霊、見たこと、ありますか？」

「突然、どうしたの？」

「いや、さっき、幽霊のようなものを見まして……」

「へー、幽霊を見たんだ」

「え、もしかして却花ちゃんは幽霊が怖くないんですか？」

「当たり前だよ。死神族が幽霊を怖がってたら、話しにならないからね」

「それは、そうですね」

「そもそも、どうしておじいちゃんは幽霊を怖がるの？この前は、魔王倒しちゃってたっていうのに。魔王と比べたら、幽霊なんて全然怖くないものじゃないの？」

「ふむ、却花ちゃんは幽霊の恐さが分からないようですね」

「え？幽霊の恐ろしいところって？」

「ふふふ、まあ、体験してみればわかりますよ。くくくくく、ふふふふふ」

「お、おじいちゃん？」

「おっと、いきなり用事が出来たようです。儂は明日の朝に帰ってきます。それでは、頑張ってください。この、『死霊の森』で」

「ちょ、ちょっと。おじいちゃん？」

「……行っちゃった。突然、どうしたんだろう？」

「ま、まさか、私が幽霊を怖がらなかったからじゃ、ないよね？」

「そ、そんなわけないよね。子供じゃないんだし」

「……でも、一応、怖がったふりくらいはしておこうかな。またこんなことになったら、面倒だし」

「でも、幽霊のどこが怖いんだろ？人間族にはあんまり幽霊は見えないらしいけど、死神族にはいっぱい見えるから、『死霊の森』じゃなくても、どこにでも幽霊は溢れかえっているものなんだよね。私からしてみれば、幽霊なんてヒトとたいしてかわらないものなのに……」

「そもそも、おじいちゃんの背中には、三人くらい幽霊が憑いてるっていうのにな。このことは、言わない方がいいのかな？」

「却花ちゃんが本当に幽霊を怖がらないのか試してみようと思っていたんですが、本当に怖くないんですね。正直、ショックです」

「し、しかし、儂に三人も憑いているなんて、驚きです。な、なんとか、出来ないものでしょうか。このままじゃ、夜に一人でトイレにも行けませんよ」

幽霊とか、マジ怖い（後書き）

死亡フラグ紹介

「はっ、幽霊なんているわけねーだろ。俺なんて昨日、酔っ払って近所の墓壊しちゃってたけど、何にも起こってねーよ」

影人族（前書き）

小さい頃、どうして影は自分と同じ動きをするのか、ずっと疑問に思っていました。影が動きを間違えないかと思って、変な動きをよくしていたのを覚えています。

今となっては、影が別の動きをしたら怖いだけですけど。

影人族

「お、おじいちゃん。か、影が変な形にっ！」

「ふむ、影人族、ですかね？」

「影人族って？」

「体が影で出来ているヒト達です。主に、魔力を持ったヒトに寄生して生きると言われています」

「えっ、それじゃあ、おじいちゃん今寄生されてるの？」

「はい、寄生されちゃってます」

「だ、大丈夫なの？」

「今は大丈夫です。まあ、このままにしていたら魔力が尽きて死んでしまいますけどね」

「じゃあ、早くなんとかしないと。というか、どうやって対処すればいいの？」

「影人族に、物理的な攻撃は効きませんからね。魔法を使います。ストップ、とね」

「すごい、影が固まってる」

「影人族に寄生されたら、こうすればいいわけです。まあ、却花ち

ゃんの持っている死神族の鎌なら、もしかすると影人族にダメージを与えられるかもしれませんが。試してみますか？」

「う、うん。……えいっ！ってきゃあっ！影から血が出てきた！」

「……あーあ。やっちゃいましたね。影人族だって、儂達と同じ、生きているヒトなのに。可哀相に。その出血じゃあ助かりません」

「ちょ、ちょっと。いや、だって、おじいちゃんが試してみるかって言ったから、大丈夫なんだと思って……」

「ふふ、冗談ですよ。そのくらいの出血くらい、影人族なら大丈夫だと思います。とにかく、魔法が切れるまでに逃げましょう」

「う、うん」

「しかしまあ、死神族の鎌はすごいですね。まさか本当に影人族に傷をつけられるとは。流石は不死の種族を殺すことが出来る鎌です」

「い、いや。照れるな」

「もしかして、死神族が世界で最強の種族なんじゃないでしょうか。何故滅びたのか疑問に思いますね」

「殺人鬼は命がたくさんあるから、死神族でも殺せないんだよ」

「なるほど。殺人鬼はやっぱり怖いですね。死の神ですら殺せないなんて……」

「死の神って？」

「あれ、知らないんですか。死神族は、この世界の八つの神のうち、死の神を担当しているんですよ」

「へえ、知らなかった。でも、八つの神って？」

「魔の神、聖の神、光の神、影の神、生の神、死の神、火の神、水の神のことです。ちなみに、却花ちゃんはこのうち二つ、却花ちゃんを合わせると三つに、既に会っています」

「えっ、いつの間に？」

「この前の大会で魔の神、魔王と、さっき影の神、影人族と会いました」

「あんなのが神なの？神って、もっとすごい感じのヒトだと思ってた」

「まあ、昔のヒトが勝手に考えたことですからね。……しかし、あんなの、は酷いでしょう。却花ちゃんだって、あんなのが死の神なの？とか思われたらいやでしょう」

「……確かに、そうだね」

「でも、聖の神は、却花ちゃんのイメージ通りの神って感じだと思いますよ。会ってみます？」

「そんなに簡単に会えるの！？」

「はい、一応知り合いですから。そうと決まれば出発です。急ぎましょう」

影人族（後書き）

登場人物紹介

？（年齢不明、影人族）

強力な魔力を持った老人に寄生して、なんとか生きながらえようとしていたけど、時間を止められ、鎌で斬られた。生まれて初めての血を流すという経験に驚いたが、家に帰ってから家族に自慢したらしい。転んでも、ただでは起きぬ、不屈の精神を持っている。

神っぽい神、要するに神（前書き）

じゃあ、魚っぽい魚は一体なんだって言うんだ！

神っぽい神、要するに神

「もしもーし、銀次です。アスタルテちゃんいますか？」

「……」

「おかしいですね。返事がありません」

「おじいちゃんが見張りの兵隊さん達とかをみんな魔法で眠らせちゃったから、怒ったんじゃない？」

「いや、あのヒトはそれくらいで怒るような心の狭いヒトじゃありません。大丈夫でしょう」

「……いや、それくらい、じゃあ済まされないことをしたと思うんだけど」

「確かに、これは流石に私でも怒りますわよ」

「そうですよね？ってうわっ！いつの間にっ！？」

「おお、久しぶりです。アスタルテさん。ご無沙汰していました」

「そうですわね、二百年ぶりくらいでしたわね。スーパーアルティメット爆走ナイトさん」

「スーパーアルティメット爆走ナイト？」

「ちょ、ちょっと。昔名乗ってた名前で呼ばないでください。今は、

銀次と名乗っています」

「そうなんですの。それは失礼でしたわ。ごめんなさい。……で、そちらの可愛らしいお嬢さんは？」

「この子の名前は却花ちゃんです。儂の孫です」

「よ、よろしくお願いしますっ」

「あら、こちらこそよろしく。却花ちゃんさん。でも、ス、銀次さん、孫って一体どういうこと？ま、まさか誘拐とか？」

「……却花ちゃんさん？」

「いいえ、誘拐なんかじゃありません。れっきとした孫です！」

「そ、そんな。まさか、結婚なさってたの？……二百年前は結婚なんてしないとか言ってたのに！！あれは嘘なの！？」

「喋り方、乱れてますよ」

「おっと、これはうっかりしていましたわ。お、おほほほほ。……でも、一体どういうことなのですか？」

「結婚なんてしていませんよ。儂は、白莉さん以外の女性は愛しませんから。却花ちゃんは、この前色々あって孫になった、養子ならぬ養孫です」

「な、なるほど。全く、最初からそうおっしゃってくだされればよいのに」

「誤解をあたえてしまっていたのなら、すみません。……しかし、アスタルテさんに会うと、白莉さんを思い出してしまいますね」

「……それは、私に会うのが嫌だ、という意味ですの？」

「いえ、そういうわけではありません。アスタルテさんは数少ない昔からの友人ですから。嫌なはずがありません」

「はあ、友人、ですか。でも、白莉さんが亡くなってから二百年経っても、あの時決めたことを守り続けているんですわね？」

「まあ、決めたことは守らないといけないものでしょう」

「それを守っていたところで、誰も喜ぶわけではありませんのに」

「……何が言いたいんですか？」

「い、いえ。た、ただ、独り身が寂しくて、その決意が揺らぐことがあれば、私に言ってくださいね。その時は私が貴方と友人以上の関係になって差し上げてもよろしくてよっ！そ、それでは私は用事があるので、さようなら、銀次さん、却花ちゃんちゃん」

「え、ちょっと？」

「……行っちゃったね、そして言っちゃったね、あのヒト」

「はい。突然どうしたのでしょうか？そして、言っちゃったね、とはどういう意味です？」

「おじいちゃん、さっきのヒトの言ったこと、理解してる？」

「いえ、最後の方は意味がよくわかりませんでした」

「やっぱりそうか。あのね、あれは俗に言う、愛の告白ってやつだよ」

「はあ、愛の告白ですか。しかし、その根拠は？」

「女の勘ってやつかな」

「ぷっ！」

「ちょ、ちょっと。どうして笑うの！？」

「いや、ふふっ、却花ちゃんは、くっ、まだ子供でしょう」

「私、これでも三百年生きてるんだけど」

「おっと、それは盲点でした。そうですね、却花ちゃんの言ってたこと、しっかり留意しておきます」

「うん、分かればよろしい」

「ぷっ！」

「笑わないでっ！」

神っぽい神、要するに神（後書き）

登場人物紹介

アスタルテ（年齢不明、聖人族）

銀次いわく、神っぽい神。でも、知り合いに対しては全然神っぽくない。貴族のような話し方をするが、それは銀次の妻だった白莉の真似をしているだけ。二百年前に色々あって、銀次に好意を寄せている。銀次より年上だが、見た目は若いので、端から見ればファザコン、というかグランドファザコンに見える。

そういえばさ……

「おじいちゃん、そういえば気になってることがあるんだけど、聞いていい？」

「うーん、あまり答えたくないことのような気がするので、駄目です」

「教えてくれないと、これからはおじいちゃんのことスーパーアルティメット爆走ナイトって呼ぶよ？」

「そ、それだけは勘弁してください！」

「じゃあさ、聞くけど、アスタルテさん、私の名前を『却花ちゃん』だと勘違いしてない？」

「はい？」

「だからさ、あのヒト、私のこと『却花ちゃんさん』とか、『却花ちゃんちゃん』とか呼んでたよね？」

「ああ、そういう意味ですか。なんだ、そんなことならいくらでも答えますよ。アスタルテさんは、ずばり却花ちゃんの名前を勘違いしています！」

「やっぱりそうなのか。じゃあさ、次あのヒトに会うことがあったら、ちゃんと誤解解いておいてね」

「はい、そのくらい朝飯前です。……これにて一件落着」

「待って。あと一つ質問があるんだけど」

「え、……」

「二百年前、おじいちゃんとあのヒトの間になにがあったの？」

「そ、それは……」

「スーパーアルティメット……」

「ま、待ってください！言います！言いますから！……二百年前に、儂の妻が戦争で亡くなったんですよ。それで、儂がぐれて、暴れまくってたら偶然アスタルテさんを助けることになってたんです。……簡単に言ってしまえば、そんなところですね」

「ぐれるって、おじいちゃんが？」

「はい、それはもうぐれぐれでしたよ。いや、ぐれぐれぐれぐらいでしたね」

「ぐれぐれぐれぐれぐれーだったの？」

「……だじゃれ、ですか？」

「ちっ、違う！そんなつもりじゃなかったの！！」

「ぐれぐれぐれぐれぐれー。……ふふふっ」

「も、もうやめてよっ！」

「じゃあ、それ相応の誠意を見せてもらわないと……」

「……スーパーアルティメット爆走ナイトのことは忘れます」

「ふむ、いいでしょう。交渉成立です」

「……はあ、あれは別にわざと言ったわけじゃないのにな」

「ふう、なんとかばれませんでしたね。却花ちゃんの舌に魔法をかけて、『ぐらい』と言おうとすると『ぐれー』って言ってしまうようにしたこと。まあ、悪いことをしたとは思いますが、仕方ありませんよね。昔の話はあまりしたくありませんし」

そういえばさ……（後書き）

ぐれぐれ、皆さんにもぐれぐれだった頃、ありますでしょうか？

僕は自称、いや、自他共に認める超シスコン兄なんで、小六の時に『妹に迷惑をかけない』を人生の目標に掲げてしまったため、反抗期真っ盛りの頃でさえぐれぐれにぐれることは出来ませんでした。

やみくもに突き進め

「く、く、くくくくく……」

「ど、どうしたんですか却花ちゃん？」

「お、く……」

「あの却花ちゃん、却花ちゃん？」

「……」

「き、気絶、していますね。一体何故でしょうか？」

「フッ、それは、この俺の熱い魂で熱中症になったんじゃねえか？」

「貴方は、闇蜘蛛族の方ですか。なるほど、それで却花ちゃんは気絶したんですね」

「……いや、さっきはノリで言っただけで、実際は違うと思うぞ」

「はあ、ならば、どういった理由なんでしょう？」

「うーん、俺の予想的に、気絶する前の最後の言葉がヒントになるんじゃねえか？」

「「く、くくくくくく、蜘蛛だ！しかも、大きい蜘蛛だ！こ、こっちこないでよっ！」の、どこにヒントがあるというのですか？」

「え、いや、お前、あの言葉を聞き取れたのか？」

「当たり前でしょう。世界広しと言えども、可愛い孫の言いたいことを完璧に予測出来ないおじいちゃんなんて、そうはいませんよ」

「……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。でも、そこまで理解出来ていて何故その子が気絶した理由がわからないんだ？」

「分からないものは分からないのですから仕方ありません。……貴方は分かっているのですか？」

「分かってるぜ」

「ほう、教えていただけます？」

「はっきり言おう。あの子は、一見ただの異常にでかい蜘蛛にしか見えない俺を見て、びっくりして気絶したんだろうな」

「なるほど。うちの孫が失礼なことを。すみませんでした」

「いやいや、別にいーぜ。こんなの、長年生きてりゃよくあることだからな」

「それはそれは、苦労なさってるんですね。いやはや、本当に申し訳ないです」

「だから謝らなくていいって。……つーか、なんでステッキを構えてこっちににじり寄って来るんだよ？こえーよ！」

「いや、本当にすみません。しかし、いくら却花ちゃんが貴方に失礼なことをしたと頭で理解しても、どうやら体の方は却花ちゃんを気絶させた貴方を許せないようです。不思議ですねぇ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺が、俺が悪いのか？そうじゃないだろう。むしろ俺は被害者だろっ！なあ、おい、聞いて……」

「グッバーイ、です」

「う、うーん。あれ、どうしてこんなところで寝てたんだろう？」

「おお、ようやく目覚めましたか。気分はどうです？」

「元気だよ。でも、何か恐ろしい物、いや者を見たような……」

「まだ寝ぼけているようですね。しっかりしてくださいよ」

「うん。そうだね、寝ぼけてるだけだよね」

「はい、では早く出発するとしましょう」

「うん」

「それにしても却花ちゃん」

「なに？」

「もし、見た目が大きな蜘蛛みたいなヒトがいたりしても、驚いたりしてはいけませんよ。姿形が違っていても、同じヒトであることに間違いは無いのですから」

「うんっ！わかった。……でも、そんなのいるわけないでしょ？」

「……それも、そうですね。ふふふ」

「あははは、おじいちゃん、いきなり変な冗談はやめてよ」

「はい、すみません。……ふふふ」

やみくもに突き進め（後書き）

登場人物紹介

？（年齢不明、闇蜘蛛族）

熱い心を持つ、優しい男。死神族の少女に自分の姿を見て気絶される。その後ステッキを持った老人に色々聞かれ、親切に答えたのだが、いきなりステッキでぼこぼこにされた。そして悟る、世の中は、理不尽なことばかりであると。

ゆめゆめ夢もみてらんないよ（前書き）

夢には、その人の深層心理が表れると聞きます。

「ふふふふふふ、却花ちゃん。おじいちゃんと、おじいちゃんと、ぐへへへへへへ」

「ちょ、ちょっとおじいちゃん？どうしたの？」

「ふふふふふ、ふーはっはっはっは！儂、いや我輩はおじいちゃんなどではなーいっ！おじいちゃんオメガだっ！」

「……」

「ふっふっふ。どうした？何故黙っている？まさか、我輩の恐ろしさに怯えて、声も出せなくなっているというのか？情けないやつめ」

「……」

「ふん。ならば、優しい我輩が、おぬしを更に怯えさせてやろう。……変身っ！オジンガーゼット！オメガっ！」

「う、うわっ。本当に変身しちゃったよ。どうしよ、この状況？」

「どうしよ、だと？もちろんそんなのは決まっている！却花ちゃんも変身して、一緒に世界の平和を守るんだた！」

「いやだよっ！こっ、来ないでっ！これ以上近づいたら、攻撃するからね！」

「ふふふ、攻撃など出来るはずがないな。なぜなら、我輩はおぬし

のおじいちゃ、ぐふっ！」

「あ、やっちゃった。ごめん」

「ぐ、ぐばぁっ。ふん、我輩を倒したところで、いい気になるなよ。我輩は、四天王の中でも、最弱。貴様程度では、他の四天王の足元にも敵わないであろう。ちなみに、もし、万が一、いや、億が一魔王様を倒したとしても、第二、第三の魔王が現れるであろう。あと、我輩の戦闘力を三とすると、魔王様の戦闘力は千くらいだ。まさに、桁が違うということだな。ははははははは。あと、魚料理で大根おろしがついている物を食べるとき、大根おろしには魚の発癌性物質かなんかをなんとかしてくれる性質があるらしい。つまり、大根おろしを、残しては、な、ら、ぬ」

「おじいちゃん！しっかりしてよ、おじいちゃん！」

「あ、それと、プリンにはプリン体が含まれていなっぶふぁっ！」

「……ふう、始末したか。よし、次の敵はさすらいの寿司職人ジョンだな。あいつを倒せば、残る四天王もあと二人だ」

「ちゃん。……却…ちゃん。…ちゃん。却花ちゃん。朝ですよ。

起きてください」

「あ、あれ?夢、だったの?」

「やっと起きましたか。しかし、夢とは、どのような夢だったのですか?」

「……いや、その、ごめんなさい」

「はあ、何故、謝るんですか?」

「……」

「今日も平和ですねえ、却花ちゃん。こんな、何事も起こらない平和な時間って、大切ですよね」

「そうだね。私としてはちょっと暇かなって思うけど」

「そうで」

「ん？おじいちゃん？……いない」

「というわけで、いざ尋常に勝負！」

「いやいや、ちょっと待ってください。そもそも貴女は誰です？」

「おっと私としたことが。まさか名乗りを忘れるとは。なんてことだ、こうなれば腹を切って詫びるしか……」

「……」

「短い人生であったな。家で私の帰りを待っている妹たちには悪い

が、これもまた天命。仕方の無いことだ」

「……」

「そ、そういえばやり残したこともいっぱいあるが、こ、これも仕方ない」

「……」

「腹を切るのは恐ろしい程の苦しみが伴うらしいが、我慢するしかない」

「……まだですか？」

「……まだ、とは？」

「いえ、腹を切るのでしょう。まだなんですか？」

「い、いや、えーと、あの、あれだ。そうっ、辞世の句をだな、考えついてなくてだな……」

「ほう、ならばこれも何かの縁です。あなたの辞世の句、儂が聞き届けましょう」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……と」

「と？」

「止めなさいよっ！」

「は？」

「アンタおかしいんじゃないのっ！普通、ヒトが腹を切ろうとしてたら止めるでしょっ！」

「儂は、貴女とは初対面ですし、貴女の決意に意見するような立場では無いと思うのですが……」

「うぐっ。い、いや、その、黙りなさいっ！普通は止めるの！悪いのはアンタ。オーケー？」

「ノー、です」

「なっ、なんですってっ！この私に口答えするなんて生意気な。アンタ、私が誰だか知っててそんなこと言ってるの？」

「いえ、知りませんが」

「ふん、じゃあ教えてあげるわ。私の名はキリア。この辺りのヒト達には『剣鬼』と恐れられているのよ」

「『剣鬼』ですか。それなら儂も聞いたことがあります。しかし、

噂ではもっと落ち着いた方だと聞きましたが」

「う……ごほんっ。うむ、見苦しいところを見せてしまい、悪かった」

「……いえ、いいですけど」

「かたじけない。そもそも私は、貴方に勝負を申し込みたくて、ここに呼んだのだ」

「呼んだというより、連れ去ったというのが正しいでしょう」

「……では、尋常に勝負」

「嫌です。帰ります」

「えっ？」

「可愛い孫が待っているんです。貴女に構っている暇はありません」

「そんなっ、しばし待ちたまえ！」

「それではさようなら。まあ、却花ちゃんが寝た後なら、勝負に付き合ってもいいですが」

「は、いや、わかりました」

「おじいちゃん、何処に行ってたの？」

「ちょっと変なヒトにからまれまして。しかし、まさかあの『剣鬼』が、あんな元気な方だったとは。というか最初から名乗ってくだされば、あんな恥を晒すこともなかったでしょうに。おっちょこちょいなヒトです。是非とも孫候補に……」

剣豪キリア（後書き）

登場人物紹介

キリア（二十歳、人間族）

剣鬼と呼ばれ、恐れられている剣術の天才。剣士っぽい話し方を心掛けているが、動揺すると素の話し方になる。様々な頑張りの結果、孫としての素質?を見抜かれ銀次と勝負する約束をすることに成功した。

特別編　剣とステッキのマジバトル（前書き）

今回は特別編です。地の文がたくさんあります。

特別編　剣とステッキのマジバトル

「約束通り来ていただけたようですな」

「はい。では早速、勝負を始めますか？」

「無論だっ！」

銀次はその言葉を聞いた瞬間、ステッキをキリアの首に突き刺そうとした。だが、キリアの刀に軌道を逸らされる。

その動きに、銀次は驚く。不意打ちを防がれたことではなく、刀を片手で持っていた事に。危ないと思った時には、既に足に痛みが走っていた。

「ぐっ、まさか二刀流だとは、驚きました」

「貴方程の力量の持ち主に、出し惜しみをしている余裕は無いからな」

言いながら、銀次の足に刺さった小刀を抜いた。足からは少しの血が出たが、一秒もしないうちに傷口はふさがった。その異様な光景にキリアは一瞬動揺したが、すぐに冷静さを取り戻す。

銀次程のヒトとの戦いで動揺すれば、それが即、死に繋がってしまうかもしれない。勝負で大切なことは、常に氷のような冷たい心を持つことだと、キリアの師は言っていた。その師にも、八歳の時には越えてしまったのだが。

さっきは銀次が「キリアは一刀流である」という先入観を持っていたため、うまく攻撃することが出来たが、次はそうはいかないだろう。それに、あの回復力では、小刀では致命傷を与えることは難

しい。

「こういう時のために小刀を袖の下に隠していたのに、それが無駄になってしまった。残念だ」

「いえ、無駄ではありませんよ。あの一撃、結構痛かったですし」

どうやら足を小刀で刺されて痛いで済むということがどういうことなのか、あの老人には分かっていないらしい。

次は、キリアの方から攻撃を仕掛けた。まず小刀で下から斬り上げ、それが防がれている間に刀で首を狙う、という算段だ。

まずは小刀で斬り上げ、それを銀次がステッキで防ぐ。ここまではキリアの予想通りだった。だが、ここで銀次が予想外の行動をとった。

小刀がステッキに触れた瞬間に、なんと素手で刃を握り、キリアから小刀を奪い取ったのだ。そしてその小刀でキリアの斬撃を防ぐ。

銀次はキリアの攻撃を防ぎ切ったと思い、キリアの表情を伺う。

キリアは、相変わらず無表情だった。

それと同時に鉄が折れる音がして、銀次の首に痛みが走る。どうやら、小刀が折れたらしい。

「ふん、小刀の方は通販で買った安物だからな。たやすく折れる」

「な、しかし、儂のステッキを防げていたでしょう?」

「剣に関しては私はプロ、貴方は素人だからな」

銀次は痛みで苦しそうな表情を浮かべていたが、キリアも表情には出さないが、心の中では泣き出したいくらいの気分だった。

小刀とは違い、苦労して手に入れた刀での斬撃を首に命中させたはずなのに、老人の首には微妙な切り傷が出来ているだけで、およそ致命傷とは言えない状態だった。

この刀が決して折れない『妖刀不劣（ようとうおとらず）』でなかったら今の衝撃で折れていたかもしれない。ちなみに、キリアはこの刀が決して劣化しないことから、刀に『れっかちゃん』という愛称をつけていた。今は全く関係ないが。

「しかし、小刀が折れて、貴女はその刀一本で戦えるのですか？降参するなら今のうちですよ」

「確かに小刀は失った。しかし、それで不利になったわけではない」

キリアは刀を両手で構え、銀次に切り掛かった。それを防いでいるうちに、段々と銀次の表情から余裕が消えていく。

小刀を使っているときよりも、あきらかにキリアの動きは素早く、洗練されたものになっていた。そして僅か十数秒の間に、銀次の体にはあちこち切り傷が出来ていた。

実はキリアが二刀流を使い始めたのは最近のことでまだ二刀流に慣れていなかったため、自身では気づいていなかったが二刀流より一刀流のときの方が強いのだ。また、通販で買った安物の小刀を折れないように使うのは至難の技で、かなりのスピードのロスになっていた。

それらの重荷が無くなった今、キリアの強さは数段上になっている。

銀次は突然強くなったキリアに驚き、追い込まれると強くなるのか、先程までは手を抜いていたのだろうか、など、様々な推測をしていた。そのどれもがハズレなのだが、キリア自身が分かっていないことを銀次が理解するのは難しいだろう。

銀次の受ける斬撃が回復力に追いついてきた頃、突然異変が起こ

った。

「もうやーめた。やめにします」

「は？」

「正々堂々なんて、やめにします。卑怯万歳、です。……ストロング、ファースト、バイン」

「え、あれ？」

キリアの斬撃は魔法で強化された銀次に傷一つつけられず、呆気にとられていると、いつの間にか蔦に身動きを封じられていた。

「ふう、すみませんね。儂、魔法専門なんですよ。まあ、若い頃は剣とか使ってましたし、ステッキも長年使っています。けれど、儂が最も得意とするのは魔法です」

「そ、そんな、嘘でしょ？」

「本当ですよ。現状を見ればわかると思いますが。……おっと、そう落ち込まないでください。儂が貴女くらいの年齢のころは、貴女程強くありませんでしたし」

「……アンタ、今何歳なの？」

「詳しくは覚えてませんが、二百は超えていますね」

「……そんなに長生き出来るわけないじゃない。アンタ、本当に人間族なの？」

「何故こんなに長生きしているのかは自分でもよくわかりません。しかし、悪魔から武器を買ったから、というのが有力な線ですね」

「悪魔から武器を買うって、どうやって？」

「普通に店で売ってますよ。悪魔なのに店を開いている奇特な方達がいるんです」

「どこにあるの？その店」

「さあ、どこでしょう？」

「お願い、教えて」

「……わかりました。貴女なら大丈夫でしょうし。その店の名は、『刹那を生きろ』です。ちなみに、その名を馬鹿にすると生存率が下がります。それで、場所は……」

店の場所を老人から教わると、キリアはその場所へすぐに向かって行った。餞別にもらった飴ちゃんをなめながら。

特別編　剣とステッキのマジバトル（後書き）

まさか、地の文がこんなにも難しいとは。果たしてまともな文章になっていたでしょうか？不安です。

只今ただいま

「ただいま、却花ちゃん」

「あ、おかえ……」

「ふむ、何故いきなり黙るのです？」

「服がぼろぼろだよ。……こういうのを露出狂って言うんだよね？やっぱりおじいちゃんは変態だったんだ」

「いやいや待ってください。儂にそんな趣味はありませんよ。これは切られたんですよ。変なヒトに」

「変なヒトって。……おじいちゃんより変なヒトなんて、そうそういないと思うんだけど」

「失礼な。儂より変なヒトなんて、世界にはたくさんいますよ。例えばですね、ええ、いました！あの方なんてどうでしょう！」

「あの方って、白衣を着てるお医者さんっぽいヒトのこと？」

「その通りです」

「あれのどこが変なの？普通の真面目そうなヒトっぽいけど……」

「わからないんですか？貴女もまだまだですねっと、ほら、こっちに来ましたよ」

「えっ……」

「ククク、君達、この僕に何の用だい？まあ、天才であるこの僕にはわかりきったことだから、別に話さなくてもいいよ。あれだろ、この僕の天才さを崇め、称えていたんだろ。ハハハハハ、ご苦労ご苦労。しかしまあ感心しないね、特に御老人。知らないヒトに向けて指を指すのは失礼ってもんじゃないかい？僕は海よりも心が広いから特別に許してあげるけど、他の頭が固く、心が狭い馬鹿共だったら、逆上していたかもしれないね。だ、か、ら、是非ともこの僕に感謝したまえ。特別に許可してあげよう。おっと、そこのお嬢さんの方は、死神族かい？そう驚いたような顔をしないでくれよ。僕は天才だから、そのくらいわかるんだよ」

「……」

「……」

「おいおい、黙らないでくれよ。もしかして君達、僕のことが嫌いなのかい？ククク、ハハハハハハ、失礼、そんなわけないよね。この世で、僕のことを嫌いなヒトなんて存在するはずがないし。天才の僕にはわかるんだ。なんでもね。フフフ、この世でわからないことなんて、何にもないからね。いや、わからないこと、あったよ。君達凡人が、どうして平気で生きていられるのか、それだけはわからない。世界にわからないことがたくさんあるのに、それが不安じゃないのかな？ねえ、折角だし、教えてよ」

「……逃げますよ」

「……う、うん」

「ちょっと待ちなよ。逃げるのかい？いや、僕から逃げるヒトなんかがいるはずがない。そうか、これが、「急用を思い出した」ってやつか。僕と会話したヒトはみんなそう言って走り去っていくんだよね。やっぱり凡人は忙しいのだろうね。よかった、僕が天才で。しかし待てよさっきのヒト達はそんなこと一言も言っていなかった。何故だ、いや、わかったぞ。さっきのヒトはヒトではなかったのだ。消去法で考えれば、すぐに答えが出たな。やはり僕は天才だ。もしかして、さっきのヒト、いや謎の生命体達は、この僕の天才さを見抜いて、正体がばれるかもしれないと危惧したのだろうな。情けないやつらだな。それにしても……」

「ふう、逃げ切りましたか」

「追ってすら来なかったけどね」

「それにしても、想像以上でした。今まで会ったヒト達の中でも、最高の異常度かもしれません」

「……」

「どうしました？」

「あのヒト、私が死神族だってこと、どうしてわかったのかな？」

「それは謎ですね。儂が魔法で、死神族だとわからないように擬装してましたのに」

「え、何で？」

「国の決まりで、神、と呼ばれる種族の方達は、それぞれの役割を果たさないといけないと、決まっているんですよ。ですから、却花ちゃんが死神族だということが国の兵隊の方達にばれると、面倒なことになるかもしれないのです」

「うわ、やっぱ私、ちゃんと仕事してた方がいいのかな……」

「仕事をしたいんですか？」

「いや、したくないけど」

「なら、しなくてもいいでしょう。生の神と呼ばれてるヒトなんて、かなり重要な仕事なのに数十年前からサボっていますし」

「そっか、そんな大切そうな役割がサボられてるなら、私だってサボってもいいよね？」

「もちろんです！」

只今ただいま（後書き）

登場人物紹介

男（年齢不明、種族不明）

自分が天才だと信じて疑わない変人。常に白衣を着ていて、何かを研究している。また、一方的に話しかけてしまう癖があり、今までまともに誰かと意思の疎通が出来たことがない。実はラスボスというものに憧れており、なんかヤバイことをしようと企んでいる。

「最近、寒くなってきたね」

「そうですね。風邪とかひかないように気をつけましょう」

「風邪？死神族である私が風邪なんてひくわけないよ。……こほんっ」

「こほん？」

「なんかさ、のどとか頭が痛いし、鼻水まで出てくるけど、まさか風邪なんかじゃないよね」

「……」

「うん？どうしたの？」

「……た、たたたたた大変！大変ですっ！却花ちゃんが風邪に！い、医者、医者はどこだっ！」

「いや、だから風邪じゃないって……」

「医者医者医者。医者は何処だ！おいっ、そこのお前っ！医者だろ、医者なんだろ？」

「おじいちゃん、知らないヒトに迷惑かけちゃだめだよ」

「却花ちゃん、このヒトは医者です。医者なんだよ。なのにさっき

名乗り出なかった。そのせいで却花ちゃんの風邪が酷くなったらどうしてくれる！なあ、お前」

「御老人。初対面のヒトに対してお前呼ばわりはないでしょう。それに、孫の前でそんなに取り乱して、恥ずかしくないのですか？」

「うぐっ。……失礼、取り乱していました」

「いえ、いいんです。貴殿の孫を思う気持ち、伝わりましたよ。いいでしょう。この闇医者ダイが必ず治療してみせましょう」

「闇医者ダイ。あの伝説の、治療できない病気など無いと言われている、医師免許を持った闇医者ですか」

「……免許持ってるんだ。ごほっごほっ」

「おっといけない。早く手術……じゃなくて風邪薬を調合しないと」

「ふむ、診察的なことをしなくても病気がわかるんですか？」

「はい。プロですから」

「それはすごい。では、却花ちゃんがどのような状態かわかるんですね」

「もちろんです。貴殿の孫は、ズバリ恋の病を患っています」

「は？」

「え？」

「……冗談です。まあ、とにかく、薬は調合出来ました。水か何かで飲んでください」

「……あ、ありがとうございます。それで、お代は？」

「お代は、二億ゴールドです」

「……冗談ですか」

「いえ、冗談などではありません。僕が冗談を言うようなヒトに見えますか？」

「……」

「とにかく、二億ゴールドですよ。分割払いでもいいですけど。……あれ、貴殿のポケット、何か面白そうな物が入っていますね。二億がいやならそれでもいいですよ」

「ふむ、ならばそうします」

「おじいちゃん、さっきのヒト、何なの？二億ゴールドの代わりに

飴ちゃんを持って行くなんて」

「確かに、二億と飴ちゃんで、飴ちゃんの方が大切とは、変わったヒトでした」

「は？そんなの当たり前でしょ。私が言いたいのは、飴ちゃんを二億なんかの代わりにするなんて、飴ちゃんに失礼でしょってことなの！」

闇医者ダイ（後書き）

登場人物紹介

ダイ（二十八歳、人間族）

闇医者をしている怪しいヒト。医者としての実力は凄いが、闇医者なので物凄い金額を請求する。コンプレックスは縁起の悪い名前と、ジョークがほぼ確実にすべること。

降雪の巷説（前書き）

なんか、適当に生活してたら、大学の推薦入試の時期がとっくに過ぎていました。
学校の友達が、推薦受かったよ、とか自慢してきたときには、久方ぶりに心の底から動揺しました。
まさか、推薦入試のことを忘れる受験生がいるなんて、事実は小説よりも奇なり、ですね。……あはは。

降雪の巻説

「ねえおじいちゃん。雪ってなに？」

「雪、ですか。もしかして、却花ちゃんは雪を見たことが無いのです？」

「うん。というか、さっき通り過ぎて行った人達が話しているのを聞いて、初めて雪って存在を知った」

「そうですか。まあ、あの森にいたのでは雪なんて見えませんからね。仕方が無いです」

「はあ、雪、見てみたいな」

「ふっふっふ。却花ちゃんが言うなら仕方がありません。儂が雪を降らせてみせましょう」

「えっ！そんなことも出来るの？早く降らせてよっ！」

「嘘です。出来ません」

「え、そんな。ひどい、楽しみにしてたのに」

「いやいや、雪は降りますよ」

「うん？どーゆーこと？」

「普通に、自然現象として雪が降ります。この空の様子だと、夕方

あたりから降りはじめるでしょう」

「やったー！雪、降るんだっ！」

「儂が降らせたことにして、却花ちゃんに尊敬されようと企んでいたのですが、うまくいきませんでした。やっぱ嘘はつけませんね」

「うわ、おじいちゃん腹黒だね」

「いえいえ、毎晩儂が寝ている間に勝手に飴ちゃんを盗み食いしている、どこかの誰かさんには全然及びませんよ」

「（ぎくぎくっ）」

「あれ、何故か却花ちゃんが動揺しているようです。一体どうしたんでしょうね？」

「い、いや、なんでもないよ。ははははは。全く、許せないよね。その誰かさんって」

「はい、許せません。誰なんでしょうね、誰かさんとは？」

「ちょ、ちょっと、どうしてこっちを見て言うのかな？まさか私を疑ってるんじゃないよね？」

「そんなはずないでしょう。そもそも、儂の可愛い孫が盗みなんてするはずありませんし」

「そ、そうだよね。あははは」

「そうですよ。ふふふふふ」

降雪の巷説（後書き）

ああ、受験怖い。

でも、よくよく考えてみれば高校受験の時は受験対策し始めたのが一月頃からだったし、今から頑張れば大丈夫、です、よね？

奴が、追ってくる

「ちょっと却花ちゃん。嫌な予感がします。早く次の町に行きましょう」

「え、嫌な予感って？」

「例えば、目茶苦茶おかしい人に追われているかのような、そんな気分です」

「……いや、意味わからないよ」

「うーむ、長年の経験的に、何かを感じるんですけどね。まあ、取り敢えず、ワープ」

「えっ、ちょっと待っ！」

「やあやあ久しぶり。僕だよ僕だよ天才だよ。実は君達に用事があってね。僕、ラスボスになろうと思ってね、出来れば、君達に主人公になってほしいんだ。敵がいないとつまらないからね。ゲームをより楽しむためには、面白い敵が必要だからね。まあ、断ろうとし

ても無駄だよ。その時は世界が滅びるだけだからね。っと、いきなり攻撃しないでよ、おじいさん。もっと大きな心が持てないのかな。可哀相に」

「……おじいちゃん、どうしてワープした先にこのヒトがいるの？」

「わかりません。それに、さっきから目玉が目玉焼きになる呪いをかけ続けているのに全く効きません。割と大変な状況です」

「……そんなグロい魔法使わないでよ。せめて全身を飴ちゃんに変える魔法とかに……」

「はあ……」

「ちょっと、この天才である僕を無視しないでくれたまえ。君達は主人公役なんだから、ラスボスに会ったらもっと緊張すべきだろう？まあいい、とにかく、僕は立派なラスボスだ。魔王城を建設するのにあと半年くらい時間がかかるから、半年後くらいに世界を救うために僕を倒しに来たまえ。きっと面白いことになるだろう」

「えー、魔王城まだ出来てないの？普通ラスボスってのはずっしり城を建ててから主人公にコンタクトとるよね？」

「う、それはそうだな。失敗失敗。天才でもミスはするんだな。驚いたよ」

「それに、ラスボスは四天王とか、四将軍とかを従えていないといけないんだよ。ちゃんといるの？」

「ぐっ、い、いない。……済まなかった。出直してくるよ。天才で

ある僕に指摘が出来るとは、どうやら君も天才であるのかもしれないな。ではさらばだ！また会おう」

「……き、却花ちゃんって、時々異常にメンタルが強いですね」

「え、どうして？」

「あんなヒトを言葉で圧倒するなんて、とても儂には出来ない芸当です」

「へえ、おじいちゃんには出来ないんだ」

「はい、絶対に出来ません。却花ちゃんはすごいですね」

「……いやあ、照れるなー」

「……将来が楽しみ且つ心配ですよ」

奴が、追ってくる（後書き）

登場人物の独り言紹介

「はあ、この天才である僕が逃げ出してしまったよ。却花ちゃんだっけ？思っていたより恐ろしい子だ。四天王に四将軍か、城が建つまでに集められるかな？いや、僕に出来ないことなど無いか。……おっと、よくよく考えてみれば、ヒトと話していて自分から別れを告げたのは初めてだったな。素晴らしい！これが「急用を思い出した」ってやつなのか！確かに、急用が出来たな。ヒト探しという急用が。ふむ、また成長してしまった。自分の天才ぶりに驚くぜ」

おっひさー（前書き）

なつかしの登場人物、黒矢さんたちです。

本当はこの物語は黒矢さんを主人公にするつもりであったために、そこそこの登場頻度です。これからもちまちまでます。

おっひさー

「おじいちゃん、なんかこの町、見たことあるような気がするんだけど」

「ああ、一度来た場所ですからね。覚えてませんか？血を採取されたこと」

「あっ。……あの恐ろしいヒトがいる、んだ」

「おっと、怖いんですか？却花ちゃんが怖がるなんて珍しいですね。そんなにも怜悧さ」

「うわあっ！ソノナヲオモイダサセナイデヨコワイコワイコワイコワイ……」

「……ちょ、ちょっと待ってください却花ちゃん。急に走ると危ないです。ちゃんとウォーミングアップをしてからにしてください。それにそちらの方角は……」

「あっ、あれ？ここはどこ？私は誰？……って、私は却花だよ」

「おじいちゃんが、いない？というか、私はなんでこんなところにいるの？」

「そういえばこの場所、一回来たことがあるような。ええと、痛っ！何故か思い出そうとすると頭が痛い！」

「うふふふっ、突然だけどあなたの血を頂くわ」

「うわあっ！いつの間に！」

「あらまあ、死神族とは珍しいわね。……って、もしかして却花ちゃん？」

「私のことを知っているんですか、まさかあなた、四天王の一角ですかっ！」

「へ？」

「ごまかしても無駄ですよ。あのラスボスさん、もう四天王を集めたんですか。思っていたより早いですね」

「いや、ちょっと待って。どうゆうこと？」

「しらばっくれても無駄です。どうやら吸血鬼族のようですね。あの吸血鬼族を配下にするとは、流石はラスボスです」

「あのー、私のこと、思い出せない？ほらっ、注射器ですよー」

「……ちゅ、注射、器。う、うわ、れ、れい、り、さ、ささ、ん、

だ」

「ふふっ、その調子だと、思い出したようね。では早速、いただきます！」

「うわあー、な、何故注射器なんですか！？吸血鬼族なら、普通に吸うんじゃないですか？」

「は？それだと汚いし……」

「ぐわ、こ、心にきました。これが吸血鬼族の精神攻撃ですか……」

「やあ、久しぶりですね。黒矢少年」

「お、白銀の旅人、ステッキマスター銀次さんじゃないですか」

「……」

「どうかしましたか？」

「……いえ、なんでもありません。それより、儂の可愛い孫を知りませんか？」

「孫、ああ、却花ちゃんのことですか。それなら、さっき怜悧が小さい子供を拉致ってたので、多分それだと思いますよ。連れ戻しに行きます？」

「いえ、恐ろしいので遠慮します。そうですね、折角ですからここで食事をとりながら待つことにしてもいいですか？」

「それはつまりお客様として料理を注もっ、ぐわっ……」

「ふむ、こけたまま動かなくなってしまいました。この様子だと、きちんと約束を守っているようですね。可哀相に」

「殺さない殺人鬼とは、やはり大変なんですね。殺さない死神族は楽しい生活をしているというのに。世の中は不平等です」

「いや、もしも却花ちゃんが黒矢少年みたいな苦しみに耐えないといけないような世界なら、儂が滅ぼしていますね。いやはや、危ない危ない」

おっひさー（後書き）

献血、したことあります？

あれ、結構体に良いらしいですよ。それに、慣れると癖になるらしいです。

僕は針が怖いので嫌ですが。

紳士に真摯な頼み事（前書き）

ふむ、携帯って、平仮名を打つと漢字の変換候補が出ますよね。

これって、駄洒落の為の機能なんでしょうか？

紳士に真摯な頼み事

「……遅いですね。黒矢少年、すみませんが、呼んできてもらえませんか？」

「わかりました。どっちを呼ぶんです？」

「もちろん却花ちゃんです。怜悧さんは、絶対に呼ばないでくださいね」

「りょうか、い出来ません。すみません」

「は、それはどういう……」

「お久しぶりです。白銀のステキステッキさん」

「……何故後ろから現れるんです？」

「いや、吸血鬼族のマニュアル本に書いてありましたし」

「……そうですか。それで、却花ちゃんはどこです？」

「ええと、こほんっ。貴方の大切な孫は預かった。帰してほしければ、陽光族の血液を、用意しろ！」

「おいっ！怜悧、白銀の旅人、ステッキマスター銀次さんになんて口のききぐわあっ！」

「……もう一度繰り返す。ステキステッキ殿。貴方の孫は預か

った。帰してほしければ陽光族の血液を用意しろ！」

「……それもマニュアル本で？」

「はい、『身代金要求マニュアル。これであなたも一流だ』に書いてありました」

「仕方ありませんね。確かに吸血鬼族は陽光族に近付けませんし」

「要求をのんだようだな。では、例の物は『科学食堂』の料理人、リイレに渡してくれ。そこで、人質を引き渡す」

「わ、わかった。だが、本当に人質は無事なのか？出来れば、人質の声を聞かせてくれ。頼む」

「仕方が無いな。ほらっ、受け取れ」

「こ、これは何だ？」

「遠距離通信機だ。これで会話が出来るぞ。そこのボタンを押してみろ」

「却花、却花か？」

「うん？おじいちゃん、どうしたの？」

「空気、空気を読んでください。却花ちゃんは今、人質です」

「……私は大丈夫だから、そんな危険なことはしないでっ！」

「駄目だ。お前は儂の大切な孫なんだっ！見捨てるわけにはいかない」

「わ、わかった。でも、気をつけてね」

「大丈夫。安心しろ」

「……くくくくく、そこまでだ。それが最後の会話になるのが嫌なら、せいぜい約束の物を急いで持ってくるんだな」

「わかった、絶対に持ってくる」

「儂、一体何をしているのでしょう？」

「……いや、それにしても、遠距離通信機、ですか。魔力を使わずに遠い場所のヒトと会話出来るとは、すごいです。そんなものを作れるなら、黒矢少年が助かる日も近いかもしれませんね」

「というか、まさか、あのカラクリを、これだけの為に作ったのでは、ない、ですよね？」

不審者に注意

「おじさん。寝てるだけで時給二千ゴールドってホント？」

「ホントだよ。君は居てくれるだけで周りを照らす、太陽みたいな子だからね」

「えへへ、太陽なんて言われると照れるよぉ」

「そうか、……い」

「えっ！おじさん！どうしたの？」

「……」

「どうして返事してくれないの！こんなところで寝ちゃったら、風邪ひくよ！」

「……」

「……死んだ、のか。チッ、まあいい。次の雇い主を探すか」

「ちょっと待ったあ！」

「うわっ、だ、誰？」

「白銀の仮面を身に纏い、町の平和を守る男。ステッキマスターだ！」

「……う、うわー、すごーい」

「ふん、お嬢さん。貴女の正体は知っています。そんな演技しなくてもよろしいですよ。『黒い太陽』フレアさん」

「ケッ、バレちまってたか。まあいい、何なんだアンタ。あたいになんか用でもあんのかよ？」

「アンタじゃない。ステッキマスターだ。または、おじいちゃん、でも可」

「あー、うっぜー。退けよ。焼き殺すぞ！」

「は？どうやって、です？」

「……体が、動かない。もしやお前、『漆黒の魔人』なのか？」

「……ぷっ」

「は、何笑ってんだよ。焼くぞコルァ！」

「ぷっ、い、いや、漆黒の、ふふふ、魔人って……」

「てめえ知らねえのかよ！ヒトの動きを封じる、漆黒の魔人のこと。兄ちゃんが言ってたんだぞ！出会ったらすぐ逃げろって」

「あ、あははは。漆黒、くくく。それに、兄ちゃ、ぷっ、ふふふふふ」

「笑ってんじゃねえっ！」

「くく、失礼。いや、面白い。もしも却花ちゃんより先に貴女に会っていたら、我慢できずに孫にしてしまっていたかもしれません。名前は、却火ちゃん、ですね」

「……てめえ、変態なのか？」

「ノンノン、そんなことはありません。が、仕事に取り掛からせていただくとしますか。くくくく」

「な、なんだ。注射器だと！止めろっ！止めてくれ！ぎゃ、ぎゃあああああああ！」

「陽光族の血、ゲットです。急いで怜悧……、リイレさんに届けるとしましょう」

不審者に注意（後書き）

登場人物紹介

フレア（十二歳、陽光族）

居るだけで周りを照らす、太陽のような子。腹黒だが、意外に素直な心を持っていて、騙されやすい。怪しいおじさんに連れていかれている途中、仮面を付け、注射器を持った老人に襲われた。

おじさん（四十歳、人間族）

俗に言うロリコン。子供を連れていく最中、別の変態に魔法で攻撃され、倒れた。その際、実は僅かに意識を保っていたのだが、フレアの豹変ぶりに精神的ダメージを受け、完全に気絶した。

れいりいれ（前書き）

上から読んでも下から読んでもトマト。

上から食べても下から食べてもトマト。

飢え、舌で味わい、美味となる、トマト。

昔は鑑賞用植物だったらしい、トマト。

僕はそんなトマトを、食べたことがありません。

なんか、赤くて怖くないですか？

れいりいれ

「怜、リイレさん。例の物を持ってきました」

「……」

「……おいっ、物は持ってきたぞ。早く却花を返してくれっ！」

「ふん、確かに本物のようだ。人質なら、我々の城の中にいる」

「……城、だとっ！」

「案内はこいつ、クロウがする。安心しろ」

「……ふん、この俺について来れるかな？（シュタッ）」

「ま、待てっ！（シュタッ）」

「……行った、か。黒、クロウ、打ち合わせと、違うよ……（シュン）」

「あの、黒矢少年？」

「はい、何でしょう？」

「なんで儂達、あんな演技してたんでしょうね？」

「いや、俺はただ、怜悧を喜ばせたかっただけですけど……」

「儂は？」

「え、わかりません。ただ単にノリ、じゃないですか？」

「ノリ、ですか」

「不満でしたか？」

「いえ、ノリ、とても良い言葉です。そのうち、儂の名前に使います！」

「名前？」

「ノリノリ海乗りボーイ、なんてどうです？」

「……」

「どうです？」

「……」

「……着きましたよ。お孫さんはこの中です」

「ほう、貴方はついて来ないのですか？」

「……はい、きゅ、急用が出来まして」

「うーむ、ならば仕方ない。それでは、また今度」

「はい、お気をつけて」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん。相変わらず凄まじい方だ。いや、今はノリノリ海乗りボーイ、か？」

「う、ひっく、黒矢」

「うおっ、びっくりしたな。怜悧、どうしたんだ？」

「打ち合わせでは、私が仕掛けをするまで、黒矢が時間を稼ぐことになってた」

「……あ」

「それなのに、あんなに急いで行って……」

「ご、ごめん。忘れてた。何でもするから許してくれ」

「何でも？」

「ああ、何でも」

「……（にやり）」

「……いや、何でもとは言ってもだな」

「血」

「……」

「血」

「……わかった。死なない程度にな」

「いただきます！……（かぷり）」

「……ストップ、ストップ！」

「（チュー、ゴクッゴクッゴクッゴクッゴクッ）……うーん、美味！」

「……」

「あれ、気絶してる。おーい、黒矢？」

「……」

「うーん、右見て、左見て、もう一回右見て。よし、誰もいない。いただきます、パートツー！」

「……」

れいりいれ（後書き）

登場人物の吸血量紹介

怜悧、リイレ

一日一食、一リットル。
ただ、本日は六リットル。血だって飲むよ、吸血鬼だもの。怜悧。

ノリノリ海乗りボーイ（前書き）

ノリノリ海乗りボーイ。彼は、ノリノリで海に乗る。あの日失った『何か』を取り戻すために。

「……お、おじいちゃん、どうしたの？」

「どうしたって……、別にどうもしていませんが」

「いや、その服！一体何があったの！？」

「ああ、これですか。これは、ノリノリ海乗りボーイの正装です」

「ノリノリ、海乗りボーイ！？」

「その通り。どうですか、カッコイイです？」

「いや、その、まあ……」

「……？」

「ダメダメだよ」

「なっ！」

「そもそも、ボーイじゃないよ。というかむしろ逆。おじいちゃんは、おじいちゃんだし」

「……あっ、ユーフォー！！」

「え、どこどこ？……て、いないじゃん！」

「……」

「うわっ、おじいちゃんまでいない。どこ行ったんだろう？」

「我が名は、ノリノリ海乗りボーイだ、です」

「……あれ、何故かさっきまでのおじいちゃんと同じ恰好をしてるヒトがいる」

「ひどいですね、却花ちゃん。儂を忘れたのですか？」

「いやいや、おじいちゃんはおじいちゃんです。そんなに若くなんて……」

「……ふふふふふ、容姿など、魔法でいくらでも変えられますし。まあ、今回は若返らせただけですけど」

「う、確かに魔法の跡がある。本当におじいちゃんなんだ」

「これで、完全にノリノリ海乗りボーイですね？」

「……（にやり）」

「……？」

「気づいていないんだね。おじいちゃん、大切なことを忘れてるよ」

「……大切な、こと？」

「大切なこと。ズバリ、今のおじいちゃんの姿は『旅人』っぽくな

い。しかも、髪も黒で、銀じゃない。これじゃあ、全然威厳が無いよ」

「ぐ、し、しかし……」

「そういえば、今の見た目じゃあ、おじいちゃんとは呼べないよね。えーと、近所のお兄さん？」

「……あ、素晴らしい形状をした流れ星！！」

「え、どこどこ。……って、そんなのどこにも……」

「……」

「おかえり、おじいちゃん」

「ただいま、却花ちゃん」

ノリノリ海乗りボーイ（後書き）

登場魔法紹介

変化の魔法、若返りの魔法

この世界では魔法を唱えることにあまり意味が無く、ただ、魔法の具体的なイメージをしやすいように何かしらの言葉を唱えることが多い。

銀次は、変化の魔法のときに「チェンジ」、若返りの魔法のときに「ヤング」と言うことが多い。

そうだ、修行をしよう（前書き）

死亡フラグ紹介

「ひえええ、殺さないでください。家には私の帰りを待つ子供達が……」

そうだ、修行をしよう

「却花ちゃん、強くなりたいとは思いませんか？」

「別に。強くなって何のメリットがあるかも知らないし」

「な、なんですと！まさか、否定されるとは思っていませんでした」

「……逆に、どうして肯定されると思ったの？」

「強くなったら、飴ちゃんを買うためのお金も稼げますし」

「っ！？」

「ふむ、どうしました？」

「おじいちゃん。私、実はめちゃくちゃ強くなりたいんだ」

「え、さっきは別に、とか言って……」

「あれはね、おじいちゃんを試したんだよ。おじいちゃんが私の嘘を見抜けるかどうか、とか」

「そうだったんですか。全然気づきませんでした。儂もまだまだ修行不足、ですね」

「う、うん。そうだね。……とにかく、強くなるには、どうすればいいの？」

「はい、強くなるには、ですね。では却花ちゃん、『ばーん』と『ぶわーん』、どっちがいいですか？」

「……、ぶわーん？」

「『ぶわーん』、でいいんですね？」

「え？う、うん」

「わかりました。『ぶわーん』、つまり魔法をマスターしたいのですね」

「ま、まあね」

「では始めるとしましょうか」

「うん」

「……」

「……（ごくり）」

「……」

「……」

「……却花ちゃん、早く魔法を使ってくださいよ」

「えぇっ！いきなり？」

「それ以外に何があるというんですか。球技の先生だったらみんな言いますよ。『とにかくボールに触れ。結局はボールに長く触ってる奴が勝つんだ』と。魔法もまたしかり、です」

「つまり、魔法を使えるようになるには、魔法を使わないといけないってこと？」

「その通り。魔法を使うにはまず魔法を……、ふむ、おかしいですね？」

「でしょ、おかしいよね？」

「はい、筋道がおかしいです。こんな矛盾したこと、出来るはずがありません」

「うんうん」

「……しかし、儂が師から教わった時は、これで出来ていたんですがね」

「……」

そうだ、修行をしよう（後書き）

リアル死亡フラグ紹介

「俺、受験落ちたら樹海行くわ」

引き続き特訓（前書き）

ファンタジーといえば魔法。魔法といえば雷ですよね。そして雷といえば電気。電気といえば電気信号。電気信号といえば脳。

なるほど、ファンタジーも結局は脳に通じるのですね。

引き続き特訓

「結局さ、魔法って一体何なの？」

「そう言われましても……」

「なんかさ、『魔法の使い方』みたいな本とかないの？」

「おお、それなら確か、ここに……。ちゃらららーん、『ハウトゥー魔法、ギンギラナイト著』」

「ギンギラナイト著って……ま、まさか」

「もちろん、儂が書きました。五、六十年程前に一儲けしようとか思いまして」

「……儲けたの？」

「いえ、本を売るには印刷技術って物が必要らしく、残念ながら儂にはそれがありませんでしたので」

「……はぁ」

「と、とにかく、読んでみますね。ふむふむ、第一に、魔力を集中する」

「……よし、多分出来たよ」

「次に、魔法の具体的なイメージをする」

「……次は？」

「魔力をイメージした場所に送る」

「……えいっ……、出来た！」

「うわっ、飴ちゃんが大量にっ！」

「いっただっきまーす。……（ぱくり）」

「まさか、初めての魔法でここまで上手く出来るとは、驚きです。……それに、昔にこの本をヒトに見せた時、誰も理解してくれなかったんですがね」

「（もぐもぐ）……何か言った？」

「いえ、何も……」

「ふう、やっぱり飴ちゃんは最高だよ」

「見て見ておじいちゃん！魔法で飴の雨を降らせたよ！」

「……魔法をこんな使い方するなんて、師が知ったら驚く、というか嘆くでしょうね」

「次は飴の竜巻。さらにー、飴の雷って、流石に雷は無理か」

「……というか却花ちゃん、飴ちゃん以外の魔法も使ってみてぐわぁっ！」

「大変っ！おじいちゃんが飴の雷にうたれちゃった！」

「……ぐう、ついに迎えが、来たの、ですね」

「おじいちゃん、しっかりして！目を覚ましてよ！」

「……おお、綺麗な川が見えます。……はい、そちらに行けばいいのですね」

「ちょっと、多分その川渡っちゃダメだよ！」

「白莉、何故そこに、いるの、です？」

「おじい・・しっ・・・て・・」

引き続き特訓（後書き）

受験キツイ。
落ちたら生活がヤバイ。
受かったら引っ越ししないといけない。引っ越ししたら妹にも師匠にも会えなくなる。
未来が怖い。

……おっと、これでは自称ほのぼのがだいなしです。もっと明るい表現をしなければ。

「きゃっほーい。人生山あり谷あり。そんな中、毎日の食べ物にも困らずに生きていけるなんて最高だぜ！」

「白莉、何故こんな場所で泳いでいるのですか？しかもバタフライ」

「……あなたの寿命が来るのをここで待ってたんだけど、いつまで経っても来ないし、暇だったのよ」

「でも、こんな川で泳いでたら風邪をひきますよ」

「風邪？風邪なんてひくわけないじゃない。そもそも風邪をひくための体が無いんだし」

「体が無い。あっ、ここってもしかして三途の川ってやつですか？」

「その通り。というか、久しぶりの再会なんだし、何か言うこと無いの？」

「ええと、お久しぶり、です？」

「……はぁ」

「上手いこと言えなくて、すみません」

「いや、どうせそんな事だろうと思ってたし、別にいいわよ。それより……」

「……？」

「私、目茶苦茶泳ぎが上手くなったのよ。ちょっと見ててよ！」

「ふふ。……わかりましたよ」

「秘術、『トビウオフライ』からの、『深海ダッシュ』。……ふぅ、どう？凄いでしょ？」

「すごいです。しかも美しい！」

「えへへ、今日から私のことは、ピチピチマーメイドガールと呼んでよ」

「いよっ、ピチピチマーメイドガール！」

「よーし、テンションが上がってきたわ！次は『スーパースピントルネード』」

「おお、素晴らしい」

「あー、遊んだ遊んだ。やっぱあなたがいると楽しいわ」

「儂も、白莉がいると楽しいですよ」

「そう……」

「うむ、何故、そんな悲しそうな顔を？」

「……あなた、寿命で死んだわけじゃないでしょう。何があったの？」

「孫に、飴の雷を当てられました」

「は？」

「まさか、飴ちゃんでヒトを殺すとは、末恐ろしい子です。……どうしてそんな顔を？」

「……あなた、孫がいるってことは、誰かと再婚したの？」

「いえ、あの子は適当な森でさらってきただけですよ」

「な、なーんだ。驚いた。危うく『真空ジェラシーキック』をお見舞いするところだったわ」

「……あの時の約束、儂が破るはずがないでしょう？」

「そうね。……あ、でも、いいの？あなたが死んだら、その子、悲しむんじゃない？」

「……盲点でした。しかし、だからといって生き返ることも出来ませんし……」

「生き返れるわよ。というか、まだ死んでないし」

「えぇっ！？」

「この川を渡るまではまだ、死ぬことは確定してないのよ。あの道、まっすぐ進んで行けば生き延びる事が出来ると思うわ。多分」

「なる、ほど。しかし……」

「私のことなら心配しないで。ここで楽しく泳ぎのトレーニングしてるし、あの世からの迎えが来ても剣で返り討ちに出来る」

「あの世からの迎え、とは、最初にいた方々ですか？」

「うん。あいつらはこの川をちゃんと渡らないヒトを連れて行っちゃうの。私以外のスイマー達はみんな連れて行かれちゃった」

「ぐう、帰りたくなくなりました」

「いや、大丈夫だって。私、『白の撃退剣姫』とまで呼ばれてるのよ。自分に」

「白の撃退剣姫、ですか。ナイスネーミングセンスです。流石は儂のネーミングの師」

「いやー照れるな。あ、師で思い出したんだけど、あなたの魔法の師に、この剣もらったのよ」

「なるほど、師匠に、ですか。なら安心です」

「……」

「……」

「スーパー吹き飛ばしタイフーン！」

「うわっ、いきなり何を！？」

「今、私の剣技じゃなくて、剣の方が凄いんだな、とか考えたでしょう？」

「いやい・・・・」

「じゃあね、あなたが本当に死ぬ時まで、ここで優雅に待ってるから。さらってきた子、大切にするのよ」

「・・・・・・・・」

三途の川（後書き）

登場人物紹介

白莉（故人、人間族）

二百年前の戦争で殺されてしまった、銀次の妻。人間族の王族で、公式の場ではおしとやかな女性を演じていたが、実は相当おてんばだった。
当時騎士をしていた銀次と駆け落ちをして、小さな小屋で楽しく暮らしていた。
殺される前の最後のセリフは「私を殺したって利益などありませんわよ。白莉を殺しても薄利、なんちゃって」

ふっかーつ！

「・・から、決してそんなことは、ありま……。あれ、ここは？」

「おじいちゃん！目を覚ましたんだ。良かった。不吉なこと言ってたし、てっきり死んじゃったのかと思ったよ」

「白莉、じゃなくて却花ちゃん。儂、どのくらい寝てました？」

「うーん、二刻くらいかな。痛感したよ、『一刻も早く』の一刻って、結構長い時間じゃん！って」

「……まあ、一刻、かなりながいですよね」

「うん。あの言葉を考えたヒトの神経を疑うよ」

「流石にそれは言い過ぎでは？」

「……ところでさ、白莉さんって、どんなヒトだったの？さっきまでぶつぶつ言ってたから、気になっちゃった」

「あまり、言いたくはないんですが」

「でも、白莉さんっておじいちゃんの奥さん的なヒトなんでしょ。つまり、私にとってはおばあちゃんなんだよ。おばあちゃんのことを知りたいと思うのって、当たり前じゃない？」

「……確かに、それはそうですね。仕方ありません、言いましょう」

「やったー！」

「ちょうど、さっき会ったばかりですしね」

「……？」

「白莉さんは、素晴らしい方でした。容姿も心も美しく、儂にとっては太陽のような存在でしたね」

「ふふ、それで？」

「なにより、ネーミングセンスが最高でした。実は、儂の今のネーミングは、白莉さんから教わった方法で考えてるんですよね」

「へー、そうなんだ。確かに、おじいちゃんのネーミングセンスはなかなかだもんね。そんなヒトに教わったんなら、納得だよ」

「うむ？違和感が」

「早く続きを教えてよ」

「ええ……、明るい方で、一緒にいるととても楽しかったですね」

「えへへ、照れるなー」

「却花ちゃん？」

「ふふ……（にこり）」

「……ま、まさか！？」

「私こと、『白の撃退剣姫』でした。あなたの魔法の師匠さんに、五分だけ生きてるヒトにとり憑ける薬、貰ってたんだよね」

「……い、いつから？」

「ふふ、私を褒めまくり始めたところから」

「……はぁ、何と言うか、恥ずかしい、ですね」

「本当は、言い忘れてたことを言うためにあの薬を使ったんだけど、まさかこんなことになってたなんてね」

「言い忘れてたとは？」

「凄いダジャレを思いついたの。まっか・・が・・・」

「……」

「・・・・・」

「あのー？」

「……う、うーん。あれ、どうしたの？」

「もしかして、却花ちゃんですか？」

「もしかしなくても私は私だよ」

「そう、ですか……」

「なんで落ち込むの！？」

「……いえ、そういうわけでは」

「いや、明らかに落ち込んでるよね？しかも、私が私だっていう、意味不明な理由で」

「そういうわけでは……」

「本当に？……（じー）」

「……落ち込みました。しかし、これには深い事情があってですね」

ふっかーつ！（後書き）

登場人物紹介

魔法の師（年齢不明、種族不明）

銀次の魔法の師匠。様々な物を作ることが生き甲斐で、不老不死の薬なども作っていたが、死んだらどうなるか、という実験をするため、天寿を全うした。
趣味は空を飛ぶことと変装。
死ぬ過程で、白莉に様々な面白グッズを譲り渡した。

恐ろしい事実（前書き）

お気づきでしょうか……

恐ろしい事実

「はぁ、儂、恐ろしいことに気づいてしまいました」

「恐ろしいって？」

「却花ちゃんが飴ちゃんを魔法で作り出せるようになったせいで、これから先、飴ちゃんを持つ優位性を失ってしまいました」

「そもそも、飴ちゃんでゆーいせいを持とうとするって考えがいけないんじゃない？」

「……ふふふ」

「な、なに？」

「おっと！突然優位性という言葉の意味を忘れてしまいました。却花ちゃん、教えてください？」

「……う」

「どうしたのですか？まさか、知ったかぶり、ではないですよね？」

「あはは、なにを言ってるのかな？そんなわけないよ」

「なら、教えてもらおうじゃありませんか」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ぐすっ」

「ああ！突然優位性という言葉の意味を思い出しました！やっぱり教えてくださらなくて結構です！」

「……そう」

「いやー、歳をとるということは、厳しいことですね。これが老化、というやつでしょうか」

「……」

「いやあ、若いという優位性、つまり立場が相手より勝っている性質、を持っている却花ちゃんが羨ましいですよ」

「……実際にはおじいちゃんの方が年下だけどね」

「そ、そうでした。うっかりしてましたよ。ははは……」

「……優位性、か。おじいちゃんの優位性、無くなったわけじゃないと思うよ」

「何故？」

「ちょっと食べてみてわかったんだけど、私が作った飴ちゃんより、おじいちゃんがくれた飴ちゃんの方が美味しいもん」

「ほ、本当ですか！？」

「うん、本当だよ。だから落ち着いて」

「すー、はー……。ふう、ふ、ふふふふふ。くくくく」

「おじいちゃん？」

「いやー、生きてて良かった。久しぶりにそう思えましたよ」

「……そんなおおげさな」

「くくく……、却花ちゃん、飴ちゃんをあげるから儂のことを御祖父様と呼んでみてはくれませんか？」

「……いや、遠慮しておくよ。飴ちゃんなら自分で作れるし。というか、調子にのらないでよ」

「……」

恐ろしい事実（後書き）

ネガポジ変換

ビフォー
時間が足りない。
アフター
「ふー、やることがいっぱいだ！人生、充実してるぜ！」

ラスボスレター（前書き）

そいや！

ラスボスレター

「おじいちゃん、手紙が届いてるよ」

「ちょっと見せてください……。やっぱ読まなくてもいいです。燃やしましょう」

「ちょっと待って！そんな、相手のヒトに悪いよ」

「……これを見ても、同じことが言えますか？」

「え、『天才もといラスボスより、低脳な……（びりっ）……大変、破っちゃった！」

「ファイアー。おっと、更に燃やしてしまいました」

「……なんというか、旅をしている私達に手紙が届く時点で、おかしいってことに気づくべきだったよね」

「確かに。しかし、一体どのような用件だったのでしょうか？」

「多分、四天王が揃ったぞ、とかじゃない？」

「なるほど、思ったよりも早いですね」

「うん……」

「どうかしましたか？」

「早く、退治した方がいいんじゃないかな？四天王のこととか教えたの、私だし。私にも責任があるような気が……」

「ぷっ、いやいや、大丈夫でしょう。この世界に生きるヒト達は、想像以上に丈夫ですから」

「でも……」

「じゃあ、ちょっとだけ調べてみますか。魔法で」

「そんなことまで出来るの？」

「はい……。そいや！」

『世界各地に四将軍と四天王、八神将が現れ、様々な調味料を略奪し始めた。だが、そのほとんどはすぐに全滅し、残っているのは四天王の一人だけ』

「……だそうです」

「……そいや、はないでしょ」

「！？」

「魔法を使うとき、そいや、とか叫んでたよね？」

「そう、ですが？」

「流石にあれは変だよ。私、引いちゃった……」

「……」

「そいや、か……」

「ま、待ってください。それ以外になにか言うことはないんですか？」

「ああ、四天王のことね。まあ、そんなことだろうとは思ってたよ。しかも四天王だけじゃなくて四将軍とか八神将とかまで集めてたね。やっぱあのヒト、天才じゃなくて馬鹿だよ。それにしてもそいやは」

「あー！あー！きーこーえーなーいー！」

「……」

「……」

「……そい」

「あー！あー！」

「……」

「子供か！」

「ぬぬ、ナイスツッコミ」

ラスボスレター（後書き）

そーいやーさー、あいつ、どうなったんだ？

そ、胃、やられちゃったんだ。

それはいやだな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8090x/

銀の放浪老人

2011年12月18日06時45分発行